



解社夏白歌卷夏總目錄

夏之上

四月初

卯日

更夜二

綈拔四

終

白重六

更夜

羊物

青卷

龍戶集

葵集七

宛米

子園子

灌仙

花摘八

花齊半

半鄧端

夏卷

更夜九

更書

更斷

更行

黃酒

古桑

風抄

更行

龍十

松魚

更秋土

總更十二

更虎

牡丹十三

更集十五

燕子花十六

花葵十八

玉卷卷



玉簪芭蕉十九	紫羅傘 ^{イナハツ}	嬰刺棠 ^ニ	芭蕉花 ^{廿二}
豆花	風車	石藤	茨花
躑躅花	美人草	葉梳草	印花 ^{廿三}
印花腐 ^苗	若楓	若草	藤 ^草 ^{廿七}
扶若草	若草花	若草	葉櫻
實椽	木草茂 ^{廿八}	木下周	常路木落 ^至
竹落 ^系	桐花	柚花 ^{廿九}	喜山楸
根穀花	栲花	繡球花	白丁花 ^卅
藪楨	椴桐花	花茄子	狗茄子
茄子	荀 ^{卅一}	條子 ^{卅二}	藤
薺	郭公 ^{卅三}	當苦入 ^卅	老當 ^{卅一}

カニトリ 鴈 ^鳥	鷓 ^鳥	割 ^{キヤウ} 葦 ^鳥	葭 ^鳥
鷹 ^鳥 入城	養 ^鳥 鸞	枝 ^鳥 魁	養 ^鳥
蚕 ^鳥 蛹	粒 ^鳥 制 ^鳥 出	子 ^鳥 子	冰 ^鳥 馬
飛 ^鳥 儀	致 ^鳥 貴 ^鳥	鴨 ^鳥 半 ^鳥 罌	物 ^鳥 蛇 ^鳥
蛇 ^鳥 衣 ^鳥 統			

夏々中

五月 ^{五十一}	葛 ^草 蒲	葛 ^草 葎 ^草	軒 ^草 葛 ^草
葛 ^草 藤 ^草 酒 ^草	葛 ^草 藤 ^草 湯	葛 ^草 藤 ^草 刀	葛 ^草 藤 ^草 步
菜 ^草 玉	巾 ^草 地 ^草 步	百 ^草 株 ^草 鏡	糝
拍 ^草 餅 ^草	懺	刺 ^草 拭 ^草 兜 ^草	菜 ^草 草 ^草 摘
菜 ^草 日	加 ^草 茂 ^草 競 ^草 馬	竹 ^草 解 ^草 日	花 ^草 葛 ^草

石竹	花旦見	長蕪州	蓮卷紫
夏菊	蓮 五十八	藻花	洋 五十九
紫陽花	紫花	百合 六一	紅藍花 六十二
薄荷	萱草	下毛花	金銀花
南天竺 六六	紫陽花	馬齒莧 <small>スハリヒユ</small>	常夏 六十四
合歡花	芍藥	藤實	酸漿 六十五
棠梨	棠梨	榴花	時計菜
棠梨	棠梨	花石榴	覆盆子
棠梨	棠梨	花石榴	青梅
棠梨	棠梨	花石榴	牡丹花
棠梨	棠梨	花石榴	花榴

檉 六十八	山梔子	交木豆	蒼芥 六十九
今年并 七十一	竹皮散	瓜花	胡瓜 七一
天瓜花	早松茸	早苗	回植 七二
回植 七三	喜田	回取 七四	子乙女
探物 七五	探物 七五	牧 七六	牧植 七九
故遺火	交繫	螢 八一	腐子 八二
蠟	編福 八五	椰子	蠟虎 <small>ハトリクモ</small>
粉川 八九	粉繩 九一	水鳥菜 九六	水鳥 九七
鴨子 九十二	輕鬼子	翡翠	羽拔鳥
交麻 九十三	照射	廉袋角	廉子
		火串	干穀

題叢自錄

小絲	海老氣 <small>未ヤ</small> 百五	有五日	六月 百九	水盆	水字	夏水 百十
六月雲	六月雨 九十五	梅雨	水餅	一發酒	祇園會	嘉定 百十一
六月雨	六月晴	虎ノ雨	坐臥納涼	富士詣	鞍馬竹伐	中ノ夏生
紙帳 百六	夏物 百	夏月 百三	七月	出干	夏日 百十二	暑 百十三
帷子 百五	夏物 百	夏月 百三	炎天 百十四	日盛	夕立 百十五	夏雨 百十六
厚物 百八	晒布	夏月 百三	夕露	旱	雨乞	雲峰 百十七
			扇 百十八	圓扇 百十九	汗 百二十	汗拭
			拭衣	日傘	簞	竹婦人 百廿一
			竹奴	抱笥	蓑枕	涼 百廿二
			納涼 百廿五	風薰 百廿七	抄水	清水 百廿八
			晒井 百廿九	麻地酒 百三十	心古	露水 百廿九
			冬瓜	送佛寺	冷汁	水粉
			水飯	冷為 百卅一	于飯	梅干
			香露散	菽植	漆取	枇杷
			揚梅	李	林檎	百日紅

炎天 百十四	日盛	夕立 百十五	夏雨 百十六
夕露	旱	雨乞	雲峰 百十七
扇 百十八	圓扇 百十九	汗 百二十	汗拭
拭衣	日傘	簞	竹婦人 百廿一
竹奴	抱笥	蓑枕	涼 百廿二
納涼 百廿五	風薰 百廿七	抄水	清水 百廿八
晒井 百廿九	麻地酒 百三十	心古	露水 百廿九
冬瓜	送佛寺	冷汁	水粉
水飯	冷為 百卅一	于飯	梅干
香露散	菽植	漆取	枇杷
揚梅	李	林檎	百日紅

夏折	夏折 <small>百廿二</small>	凌霄花	慈姑 <small>才无夕カ</small>
何骨 <small>カウホ子</small>	芙蓉花	蓴菜	海松
荷花	夏草 <small>百廿三</small>	苦苣	忍冬
芳春羅 <small>ガクン</small>	釣鐘草	鸚鵡草	凡蘭
五葉 <small>ホウシ</small>	鴨足草 <small>ニクノシタ</small>	荷花	射干
紫蘇	喜鬼灯	赤草	麻
藍川 <small>百廿五</small>	綿花	菊	夏草
敦子花 <small>百廿六</small>	夕顔 <small>百廿七</small>	喜顰 <small>百廿九</small>	紅夏 <small>廿ケ</small>
新麥	小麦 <small>百廿八</small>	瓜	淺瓜
甜瓜 <small>ニクハ</small>	南瓜	唐菰 <small>百卅</small>	越鵲 <small>ニクハリ</small>
夏菜	粟	怪 <small>百卅一</small>	物

毛虫	紙魚	金龜 <small>百卅二</small>	黏
川將	小鷄	鱧魚	海月 <small>カ</small>
仲鷄	栗	夏神 <small>百卅三</small>	日折 <small>使</small>
市板	川社 <small>百卅四</small>	秋代	茅蕪
豆藤	夏瘦	夏雲 <small>百卅五</small>	夏心
夏水	夏川 <small>百卅六</small>	夏海	夏水
秋込	晚夏 <small>百卅七</small>	惜夏	晚夏 <small>立秋</small>
夏雜			

夏月詠

俳諧讀句題兼夏上

椿五太郎輯



四 月 寝たれてありたけまはり月如
 胡麻をて牛ふりたる月如
 雪の孩えもてよ月如
 つらくとえはよるまはり月如
 夢のまはるる月如
 まことの元はつくと月如
 雪の心路はつくと月如
 雪に危れ小里は月如
 牛多く吼る月如

曉甚 重厚 五明 卧央 斗入 恒丸 拱六 存亞 平角

願兼夏

臥中巻て心の根をさすは
 直ひつちて机の口より
 片づくると小川をさすは
 梳人もももむの口より
 くれくと抱にまゝさすは
 心先の志をさすは
 杖より杖にさすは
 明子のほのくさすは
 木のきれけりもさすは
 白濁てはさすは
 くらりたれにさすは

岳 麓
 葵 亭
 菊 也
 菊 笠
 漫 々
 維 喙
 我 少
 公 路
 休 祥
 希 言
 有 管

卯 力

名もさしにさすは
 梅檀のたのめりさすは
 卯りさすは
 卯りさすは
 卯りさすは
 卯りさすは
 卯りさすは
 卯りさすは
 卯りさすは
 卯りさすは

足 直
 者 三
 冥 二
 爽 把
 長 高
 梅 岑
 宗 瑞
 善 木
 今
 葵 左
 檜 瓦

題 垂 髪

夏衣や舊ハ夏ウ路ハ白
大名ハ夏ウたてウリ夏衣
夏衣ハ夏ウおた刀佩ハ
酒吞の膝登過ハ衣ウ
ウウウハ狗ウハ夏衣ハ
病人のウウハ夏衣ハ
夏衣ハ夏ウハ夏衣ハ
古衣ハ夏ウハ夏衣ハ
ウウハ夏ウハ夏衣ハ
風ハ夏ウハ夏衣ハ
心夏ウハ夏衣ハ

白 曉 白 几 洪 白 斗 夏 喜
川

〇二

夏衣ハ夏ウハ夏衣ハ
大名ハ夏ウハ夏衣ハ
夏衣ハ夏ウハ夏衣ハ
酒吞の膝登過ハ衣ウ
ウウウハ狗ウハ夏衣ハ
病人のウウハ夏衣ハ
夏衣ハ夏ウハ夏衣ハ
古衣ハ夏ウハ夏衣ハ
ウウハ夏ウハ夏衣ハ
風ハ夏ウハ夏衣ハ
心夏ウハ夏衣ハ

松 士 植 升 洪 成 肩 洪 可 全
兄 幼 又 六 衣 衣 衣 衣 衣 衣

題叢夏

礼と名の各ハ意味ナシ文礼
 花久根つらねねそそのころね
 人申に旭えんより文礼
 方に保ねうちハ保ま文礼
 猿人ハとくすぶく在り人
 妻ヤ弟よりヤ打あたるし船の衆
 志しけれ旭のうくりや文礼
 ついにねおおてころん人
 礼うてふこしにたり杜島
 吃くと文おんたり文礼
 右より以命の先にふ文

大阜 乙二 今 岳 轆 道 彦 力 月 彦 義 比 祥 亦 聖 侯 魯 隱 電 旋

礼うていてそ人そをされり
 更礼何やうその志のけり
 白芥子と乾うそえん 文礼
 人うしくそえり言 在
 吉そんうそんや 在 人
 昔の良のほろりそと結さり文礼
 わぶうて杜母咲りた神さし
 松ハ世のうれそく人 在
 灯を土より打うし文 在
 花うて女子れふくそれり
 考のそれ自らそはり文 在

陸 吾 石 葵 亭 考 笠 一 茶 菊 也 三 中 人 似 藤 世 竹 春 耕 左 文 省 吾

題叢是

袷

袴

袴

聖ト也鳴ノ堂ノ言スん 又 衣 在
 又衣ノ袴ノひハけル者ノ方ハうラし
 又衣ノ風ノ塵ノ幸ハまリてノうラる
 衣ノ風ノ塵ノ幸ハまリてノうラる
 袴ノひハけル者ノ方ハうラし
 又衣ノ風ノ塵ノ幸ハまリてノうラる
 袴ノひハけル者ノ方ハうラし

甲斐 袴 下袴
 袴 白 袷 出 綛 小
 今 几 童 出 綛 小 今

題叢長

小襟より針指し出に袷
 袷より針指し出に袷
 袴ひ指し出に袷
 袴ひ指し出に袷
 袴ひ指し出に袷
 袴ひ指し出に袷
 袴ひ指し出に袷
 袴ひ指し出に袷
 袴ひ指し出に袷
 袴ひ指し出に袷
 袴ひ指し出に袷

今 几 童 出 綛 小 今
 今 几 童 出 綛 小 今

出素に墨引れたる初水
秋風そよ入道に似し
飛鳥のさそふる初水
道草のちみよも初水
初水そよ本流うらぶよえ如
心と出て見れはさうり初水
初水作しふまをぬれり
秋風そよと流の子れみれり
あちうらうらと見え初水
初水そよつりくろる親子如
秋風そよ心淋しき夕月風

平角 長高 眞々 兀白 雁凡 文角 蓬宇 井古 左逸 久臈 香凡

白 電

白電は晴れお春中に年の出ん
白きよ夏来れりといふもり

夏 礼

白きよ一雨くればや吹ん
苗む人の夏礼のこころ下り

青 単 物 簾

菴の眼をましりてり夏礼
さや夏礼の敷はさぬ学まの
茂草や雨りしりさるる若草
菴に花柄りてうらや若草
瓜先を巻のけや若草
学れりもさうらなますれ
秋風そよ夕月をえますれ

菴花 芦雁 漱花 炎吻 白棧 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

題叢夏

筑戸祭

十日きて十日のふらぬむき屋
麦をたんの川新やき屋
ふれふや死に危むむのうら
まき屋路路人むつろく
馬帽ふふに馬帽子屋
き屋むれむれむれむれ
ふらむ路路くむれむれ
常より入むむむむむ
ふらむ路路むれむれ
筑戸祭のふらむむむむ
き屋むらむらむらむら

吉川 道彦 一葉 湖中 柑翠 李尺 命貫 子逸 祐昌 知唐

奏

小田子中筑戸祭の鹿
古湯といをれて安まのふら
呉外に世々に奏のふら
下この下のをくし奏のふら
津風と持ちあさし奏のふら
おろしたる奏のふら
りやうけ奏のふら
拾ひあけては奏のふら
あふれむら川瀬の流むら
頬尚にきをむら
人むらむら

麦泉 護物 榑老 雙甚 爽太 宗漢 保吉 成青 魯隠 玄雄 宗漢

詠

朱

題葉長

千園子 灌佛

千園子 浮くかたき志どうけ子園子
 灌佛 二本の坊は中をの
 産湯よりしれはくゆる地
 流はやくはくふる柳陰
 ちるをよれ中にせくは
 その有かをふりしやゆき
 流はやくと出れは葉の本原
 流はのわがやけとはなれ
 筆と一度はそた司はく
 天まで甘くはの産湯か
 肌脱て暑さる世やゆき

詠留 無醉 園更 菊太 左産 白旗 今 存 亜 松兄 完素 成炎

花 痛 花 痛 堂

うか人しいさきさくはせき
 流はやく又のせりもあもん
 あくてはのせれをんかり
 松風のよも吹やゆき
 流はやく世のながさをと見せ戸
 流はやくも一里ん暖そは
 本をまきしてせれさゆか
 流はやく常盤本にふる雪の白
 明るよふは痛児の松と出る
 君り代や四百八十花流
 花流堂の詩流もあはる

道克 蕉白 田人 女 彦 彦 瀬江 一水 天外 鳥醉 葵太

竿擲碁

花は虫賣傳つたふらんうん
 蛇蜂のよんふれんてふは虫
 そことふれんことを渡ぬは虫
 腕たふやぬんたふしふは虫
 ふれぬんふれぬ竿たふしふ
 かり花今跳こてしはれぬ
 文に舞つるふは管たふん
 文舞のふに言つるふは教ふ
 文舞や忘て塊に怒る
 けりやふぬははるしのふ
 文舞や人の呉たふ物ふ

曉甚
 百明
 左明
 扶雲
 金波
 芦雁
 白旆
 年心
 宜麦
 吳衣
 至長

夏 籟

夏 花

夏 書

清ふた書にすむる文ふ
 ふ二節文ふふとと田引と
 夕陰や駕の小籠の文花持
 舞の物ふかがる文ふり
 文百の雲しゆわぬふ
 りをさつてふふる字の文ふ
 志のふ字ぬに雲つく文ふ
 いろくいろりりたる文ふ
 花ふれろく文ふの机ふれ
 文ふとん弦ふふ春の素表
 うが人の文ふにふ心祝ふ

白旆
 乙二
 一葉
 護物
 尋村
 今
 几帯
 大江丸
 祐男
 乙二
 長高

題叢夏

夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏
新	新	行	酒	菜	風	風
その中に昼茶いさね交新か	交新かん必人をそつてさ	鉄炮も引て成し交百口	酒肴を中松れり多氏煙の門	机控て古菜捲出以壺の底	古菜の多人しつるん世	風柳よあすじき菜巻たじし
梅此	重原	夢友	久風	田礼	京師	百川
一桑	葵亭				丈左	梅尾

さとし

節

節	節	節	節	節	節	節	節
笠をけられたる交古か	筆の戸下交の筆の控	その中に昼茶いさね交新か	交新かん必人をそつてさ	鉄炮も引て成し交百口	酒肴を中松れり多氏煙の門	机控て古菜捲出以壺の底	古菜の多人しつるん世
風柳よあすじき菜巻たじし	風柳よあすじき菜巻たじし	風柳よあすじき菜巻たじし	風柳よあすじき菜巻たじし	風柳よあすじき菜巻たじし	風柳よあすじき菜巻たじし	風柳よあすじき菜巻たじし	風柳よあすじき菜巻たじし
貞佐	宗瑞	葵太	保吉	伊二	篤老	美九	

題叢夏

松魚

那志あるついで先や海の音
活て来るまのりよるし初磯
板のりみふ登人よ初松魚
地を走るあまを周し磯賣
おふとた偽るしし初松魚
面白の妻あふふ初や初松魚
これてを後に死るれ初磯
日くけや松魚の脊久後の節
とくしと平陸夫のそく初松魚
初松魚下り設者の思初磯
その明の下をばしと初松魚

丹波 去涯
予醉
曉甚
今
白旗
夔々
今
百助
保吉
以足
恒丸

麦秋

その戸や人の志との初松魚
うけ玉の周にむちる松魚か
うけ解とまきいそけ初磯
松瓜とて苗てうらむと初松魚
初松魚れん花のまもあえ
くまの松くれ磯も自費か
曙ハ友の花うり初松魚
分あもさくさくはより初松魚
ぬ厚のやあもほふ初松魚
貝甲ハ成し初松魚あはたし
まらうちやふらむをさくく等の先

去換
洞と
三浦人
思く
学笠
一茶
素郷
道彦
一子
五旗
橋出

題叢夏

飯登正狐道よあやまの粒
病人の呼吸もさるる麦の粒
梳舞ししきるやまの秋の暮
乞食やんせはあやまの粒
宵闇の窟中より危まの粒
まねや赤ふんもさるる
まねや埃の中と塵に取
よぬのきり出ぬりや霞をほ
あかりの社や秋もまの粒
まねや櫛にくりひし
田を植て後にまねの田

会 会 会 会 会
会 会 会 会 会
会 会 会 会 会
会 会 会 会 会
会 会 会 会 会
会 会 会 会 会
会 会 会 会 会
会 会 会 会 会
会 会 会 会 会
会 会 会 会 会

〇十一

穂 麦
青 嵐

麦の穂をさるるりりりり
まねやあはれの花の粒
持れ木もさるるやまの粒
飯羹のち飯羹れまの粒
ねえ夕々のさるるやまの粒
まねをさるるやまの粒
まの穂をさるる心戸に
まねをさるるの粒
荒破やりさるる
心戸や天を拾ふまね

白居 岳路 木海 二川 松枝 淋心 檉素 鴉嘯 粟粒 白粒 会

題 葉 聖 八

古風漸いたる落に流る水
弓持の筆れきとよまをありし
麦刈のよにともりき花
比へる丸てたてふみゆき花
砂村下きい東風ふき花の
同の糸のまはきあひき
まきわんお花のまありし
仲野うる籠のしりやき花
古風ふく下小流の流えき
筋道に小村をたりき花
関との通れとよまをありし

保吉
百助
麦二
士朗
恒丸
幸大
大身
道老
今
共堂
今戸
秀翁

牡丹

古風起出て見れはまもるし
古風麻の流出に禁り花
坊壺に吹とまりたりき花
花多てりんと抱りり牡丹
百あのみまの意燃る牡丹
葉とらまの和を静る牡丹
牡丹切て葉の表へし夕花
ちりて花付んたつはえ花
白きの定ゆりて牡丹花
ふきりてき欄に牡丹花
り花本の花御そほえん花

修徳 路人
江戸女 琴糸
浪心 嵐谷
曉菫
几菴
白権
花お
今
葵老
今
大江丸

題兼夏

ば取に人きりてはるんか
 及深なるまゝし牡母此ハを春
 及びれてゝゝ庭の牡母か
 時人をきくぬ歎けたる牡母
 とやくと牡母つりとむ塙の内
 考の教りて参るはるんか
 黄んん居して白す牡母か
 つちの葉しものゝと牡母か
 牡母好んやけれすめりり
 嘆息して心のきさる牡母か
 白牡母たる時言れりりりり

公
 松尾
 希言
 祐男
 士切
 遅方
 本僊
 菜兆
 龜文
 成貞
 一醒

白を係てつくと見る牡母か
 君園に入てしつりき牡母か
 りゝとれきんあゝし白牡母
 乾風にちや牡母もたりの
 飛蝶を喰んたるはるんか
 とつたりと友はあつと牡母か
 平のあつたつと牡母か
 花いそのまもたつと牡母か
 りあつても小つと花の牡母か
 花ふつとやとすれは牡母か
 ねえとりと花さるは牡母か

芳之
 考成
 今
 沾嶺
 展就
 一草
 乙二
 月尾
 岳路
 尺天
 月化

横町の池車新く牡子あ
不つらうと為ぬ牡子の心
海山のくしなをりぬ牡子
一輪の牡子残り世にあり
とつらうも又毎日の片らん
志つらうを人けあつて牡子
春ふ辰の泪よりし牡子
あはれてるる志つし牡子
牡子とくしあてその心を
も枝を押しつけて嘆けん
笑にさるぬらう牡子のふ

其堂
養以
秀園
蕉白
雪旆
葵亭
常笠
長高
陸奥
麦洲
菊也
三原人

向牡子嘆て十をとりたれ
町人の強きりしらん
牡子ありと人いふ心
ちる花のこしとる牡子
向牡子風を抱て多れり
鈴りさげぬ牡子に志
碎きれて蝶のこころ牡子
ちるうとれも松つけり牡子
あやめふらう向牡子
牡子嘆て依れ志を起し
んともる中向牡子の

女志宇
秋史
卓池
乘靴
碩布
星銘
居然
五光
舊頂
松昌
丙子

題叢夏

ちのちのれてもては清き牡丹か
 蝶ももよの陰より牡丹畑
 ぞむかやとよしけとよしに牡丹花
 牡丹咲と覚て是を女の花
 白牡丹様の花の後に此日
 贈りして甚にうれたる牡丹か
 白のりを大に著る牡丹か
 花といふ牡丹もあつたふれ
 いふれ牡丹もあつたふれ
 為菜に其の歌はうりりりり
 為菜に細戸つるる唐久れ

尾張 藤井
 尾張 女 二 糸
 駿河 画半
 伊豫 桃序
 伊豫 甚松
 母屋 桑隠
 藤 瑞新
 大 斧
 向 旄
 伊 官 又

又六代為菜つるる心あか
 為菜や新に踏さうりりり
 為菜にたのしむる花久れ
 為菜やとよはむの小さうり
 為菜や牙おさふに花柳子形
 為菜はいふれもよも咲たふれ
 為菜とるれ久中珍あり牡丹
 為菜とるれ久中珍あり牡丹
 人々の原をさうしふるる
 牡丹花をさうして咲まら
 飯初に足てさうし牡丹

尾張 李 豊
 尾張 尚 心
 尾張 柳 居
 尾張 曉 甚
 尾張 莫 左
 尾張 今
 尾張 樽 元

燕
 子
 花

白に人立もさるやまのけり
 宗澄れ交れさるもの杜
 ともさるものさるもの杜
 杜も折んと折れぬ花を
 ありて一もさるものさるもの
 杜もやさしつるものさるもの
 朝風やた今嘆し杜
 杜も是るやまの甲一板
 りさるものいつさつるもの杜
 杜もあさるものさるもの
 杜も白くさるものさるもの

白楳
 保吉
 吉蔵
 希言
 謀道
 存亜
 恒丸
 寒崖
 成貞
 蔭笠
 之顧

朝のりハ歌も罷し杜
 垣石をさるものさるもの杜
 人さるものさるもの杜
 自ら折れいとお惚れぬ杜
 考のさるものさるもの
 多るけ下又もほけり杜
 短歌の花ハ咲き杜
 投入してさるものさるもの
 人についてまがけけり杜
 杜もあさるものさるもの
 生へ白けてさるもの杜

甘谷
 可教王
 一子
 道虎
 今
 夢亭
 養礼
 魯隠
 吉蔵
 旋剛
 長高

杜若心家六芝に咲きし
大庭の情もやふらうら
あけ片のやまらと云く杜若
ひらりし二人ハ情杜若
あふてとるや池の杜若
あに來て小石浦や杜若
杜若酒吞氏の爲 爲
燕子花今もふらうら
杜若心家六芝に咲きし
杜若心家六芝に咲きし
くつ着野にえをくし杜若

寛松
申高
万和
菊也
武陵
志宇
護物
子影
碩布
匪濱
秋慶

情しまた心家六芝に咲きし
そふの影くうら杜若
青帽子もく女提り杜若
朝のうら人小来ぬ杜若
四津の益(下)さよらるる
良の皺の花にけり杜若
杜若同心くさくさ人杜若
益のちんふらや杜若
月のわくくほらちり杜若
秋やけれをさ奪ふやふら
樹のちんはぬつる家や杜若

漫く
我雪
尼来月
郁賀
小尼
芝心
雲翼
可来
野揚
玉光
警雪

帝のつとめ坂のせれり杜若 甲斐 文馬
 燕ふ花にらんとけふふ二つ 筑前 栄如
 まにけし暖見たりふらけり 下尾 道長
 赤土の流れるしてふ守を 大和 杜若
 君の代の船に逢ふに杜若 巽 朝氣人
 りにけりて暖見たりふ 保吉 園更
 子をけりて暖見たりふ 戸 橋人
 めるこの戸やの敷を 下尾 月記
 と船にけり八月八分より花 東 東結
 ありたりとふ花 下尾 東結
 昔の昔 下尾 東結

玉衣色蕉 井教へのふとび文の芭蕉 雪笠 雪笠
 紫冠傘 いらそつ平花の御りを活 若川 若川
 立臈に利れ 鹿 鹿
 ちのち 鹿 鹿
 地蔵の境 鹿 鹿
 白 鹿 鹿
 荒 鹿 鹿
 湯 鹿 鹿
 芥 鹿 鹿
 芥 鹿 鹿
 芥 鹿 鹿

題兼友

藤を道よみおりにけしちる夕伽
 何そのそくし咲畑に鼻をくひ
 けの香けけけけけけけけけけけ
 天は風をけけけけけけけけけけ
 けけ畑や畑のけけけけけけけ
 けけけけのけけけけけけけけけ
 けけけけのけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 一合のけけけけけけけけけけけ

保吉 蝶美 大江丸 合 感志 希言 有堂 恒丸 士朗 合 不昭

けけのけけけけけけけけけけけ
 咲けけけけ味香けけ畑やけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけ

長翠 青麓 樗堂 棠兆 成貞 合 白麻 兄直 完来 可教星

何花もちる時さるるの花
 義とあておりにくしのふんか
 笑初るくしや藤首指古そ
 菊や花名中のくし
 くしの花名れうたひも動は
 白くしにを雷のももぶら
 花くしや打りへんきぶ聖の朝
 白くしに服をすきなり朝是
 榴の灯にいつてまゐるやうしのふ
 まつゆのまもくをくやうしのふ
 松風もさうく時やうしの花

菊也
 海人
 逆英
 文常
 共成
 东野
 谷野
 阿量
 養喙
 李尺
 祇吟

草の花
 蠶豆花
 豆の花
 風車
 石蓆
 茨花

人よりも羽を咲くしのたうく
 うま風をくを紗されてらふのふ
 蝶に白くくをくくくくくくく
 涙てすらすのくくくくくくく
 蝶はまむむすうくくくくく
 いそまや流くをいかに及れに
 ふ茨古マのたに似るく
 ちんてまにやきり受茨か
 しくし茨の花垣護あそ
 朝くは標くくく 茨か
 花茨ふられあうくま色

漢
 蝶
 学
 青
 巴
 一
 益
 人
 保
 養
 力

夏も仕違ふて入る夏の花
 卯の花に中よりけりも前の子
 うもいれぬはともすれば花炭
 龍噴まう岸にひつくと花の心
 是中やそれとまじつともいふ
 裏つに垣方とていふ美人子
 蝶くも遠く一歩とて美人子
 くれくもいふれりや葉挽子
 卯の花に中ゆく葉の下の海
 卯の花や色とていふ花の海
 卯のふ下打ての及の裏花

戸 對 岳 守 号 岳 岳
 共 對 守 号 岳 岳
 丁 友 共 對 守 号 岳 岳
 西 考 共 對 守 号 岳 岳
 院 甚 共 對 守 号 岳 岳
 白 燈 共 對 守 号 岳 岳
 全 共 對 守 号 岳 岳

卯の花の葉ハまき又まきか
 卯の花にけりまき小まきか
 卯の花もまきて垣の中男か
 踏えて卯の花つらむおるか
 卯の花を縁にけりまき花か
 卯の花の中よりまき美人か
 いづこもまき卯の花垣のあしか
 卯の花の卯流うたつそ帆をたせ
 卯の花や櫻うたつそまきか
 卯の花やまきまきけりまきか
 卯の花の咲くはを降にけり

存 亞
 院 丸
 士 朗
 櫻 堂
 葉 飛
 成 員
 完 素
 祥 木
 可 教 堂
 全
 一 子

まふし人れお花吹風より
庭よりしておの花をや田一枚
鳥帽子来ておの花おしむしお
お花のおりおめしおお
お花や白の目切と考や
おの及おの花おまお
お花の残りおおあのみ
お花にむりおておし
おてえておりお花お
お花をとおしおお
ひめのおりおけおお

乙二
乃光
今
養元
一系
魯隈
権剛
亞次
漫と
赤坊
葉明

郊花腐

多楓

お花にうまおおもひしお
お花や園もりおもりお
お花やとくおおあお
おふや電のおおあ
お花にめおお
お花に子おのせお
おの名のおておお
おのにお花をこお
おくのおおお
およりおのふお
おおおおお

市川二
偽一
其概
山城葉居
左節
百川
保若
肩山
長翠
香三

青牛

返壳

養乳

牛木

麦菊

麦阮

湖中

牛巧

桃文

春燒

園更

三行

三行

三行

三行

三行

三行

三行

三行

三行

三行

三行

三行

湖中
春燒
園更

桃文
牛巧

麦阮
麦菊

牛木
養乳

返壳
青牛

里の都をふらふてふのふまふ
まもまもふまふにたふまふ
ふまふよてふまふりふまふ
煮の竹み枝よのたふまふまふ
木まのふまふは道しふまふ
ふまふてふまのふまふまふ
何れ木れ花まふまふまふ
傘まのふまふまふまふまふ
留まのふまふまふまふまふ
一鉢をまふまふまふまふ
りしの木れまふまふまふまふ

園更

桃文

牛巧

麦阮

麦菊

牛木

養乳

返壳

青牛

斗入

題最長

これゆゑと皇曆やせりるは
延々大業しるはるるを
ふゆくと芳改るるを
柴大戸の敷く志あるを
とくくと然の底に居るを
戸にきて小る来て鳴るを
世下り先へ来し居るを
多しとくるとはるるを
傘のちみとくるとあるを
そくくとあるを
戸にきて心遊の居るを

存 亞
希 言
臣 九
士 切
公
洪 道
八 風
杜 匹
棠 兆
樟 堂
吳 心

親方のたのしみは
口のちりりりるは
ふとく（風のはい）
花をいふを
写のすを
橙つ心を
をを
然風を
花の戸も
肉に
嘴う

百 堂
成 員
百 毎
萬 里
心 非
乙 二
公
常 堂
長 為
号 老
塊 翁

又をうしてまゝもくち板か
子半のつらりと産るを
森とわらゐるを暮ら、朝のうら
夜をを味、かひのこころし
つらりの月もよきわらゐる
美豆や白のををた、末、影
朝凡の戸は吹よりむらゐる
あまふ人をえりるををふ
ありとよきしやゐるを流のうら
神にうけ計やゐるを片、
舟の飯きりまゝよりゐるを陸、

一茶
寒松
雪枕
菅庵
舟池
秋拳
漫々
星誘
籠啄
成蹊
豪心

旭はれ家のうらゐるををふか
戸のれ、白の隙のゐるををふか
猫の目もををた、成るををふか
そよよにけしむ下はををふか
松毬の流とあるををを法
わらゐるの所したるをををふか
笑つてまゝ、夏のゐるををふか
枕のゐるをや鬼もをを森、竹
あゝ花の面をし、跡のゐるををふか
子規、口ひんうつるをををふか
葉を費して、あゝ不吉ををの森、けり

女
後藤
其成
吾雀
乙裳
一新
巨剛
斗入
似藤
洪心
李友
孔樂

葉 櫻

春櫻やささけさるまはるより
 春櫻に風のつらさを忘るり
 春櫻や世にふり人の世あり日
 春櫻やえむもやむ人い
 春櫻の火帯するや池の上
 春櫻や牛のふらる片山家
 春櫻はたむひ色の櫻水
 春櫻の氣ハ平のに流れり
 春櫻とつて陸を櫻の上をり
 春櫻はこれハ々の櫻美風あり
 春櫻や采菊の喰む

江戸 一雲
 左馬 兼雲
 子影
 長尾 麴平
 柿葉
 茶静
 一葉
 花村
 一踏

夷 櫻

本草 櫻

櫻の美小所ハ奇にみれり
 櫻の心や人も来り居るま志あり
 鳥の心は志あり人ハ櫻水
 木も美にありて花ハ葉の定
 陽泉鼻に到て花ハ葉の定
 下言や櫻の美ささささささ
 彫の子もれめし木下言
 下言に壬生ハ小櫻ハ解水
 おれくといふハ木下言
 下言や物のありて小言原
 何れ中の櫻ハ木下言

折江 菊房
 蝶夢
 星布
 近亮
 星麿
 白旗
 祐昌
 一醒
 然月日
 左馬
 今

常盤木原系

洞あはち志ちけねや木下書
 碑を杖ていろふや木下書
 常盤木の原をいづて静く
 楠ちるや七つやうの虫物よ
 とふは木の火をらるる落葉
 松ちるや大にけつる春風の
 葉を笑し松の葉を落す後の
 及中へ飛遠出て松をらる
 ぬふふとん出て掃竹の葉を
 色に風に相控して花を
 人やそとそとせ余りや桐の花

下海 宗
 斗圃 貨僕
 菊三
 乙二
 李光
 府人
 遊史
 護物
 雙甚
 保若

柚の花

おりひの玉の井さし(桐の心
 花咲ぬ七度切し桐の本に
 葉の落しは襟に落るり桐の花
 花枝は豊ひさなる花柚か
 先小柄巻そそのほふ柚か
 花柚ふらう久て屋の簷か
 袂々連糸を懐るふ柚か
 柚の花を尻目に集り玉子買
 柚の花は軽く夢に花丸
 柚の花やなう咲てもまの敷
 柚の花の息もなむう勢の妻

越後 今
 松魚 路人
 今 斂
 白権
 白権
 年心
 白老
 夷仙
 北谷
 女 夫

題叢長

青心椒

白心出る青心椒下葉の葉

加賀 正寄

根穀花

糸鴨ホに根穀のふのこけ丸多

陸奥 志順

柳花

柳花花より平塚花の心家集

江戸 改二

何事の敷にむろん柳花

美濃 志橋

原筵に登るとたり柳花

美濃 柳堂

枕のふのふをささる柳花

美濃 奇剛

炭柳の志ぶくふと来にり

一茶

柳のふらふらと巻と柳花

漫

泥村やあり花すまのふり咲

可布

麦飯のふらふら白心柳花

左舟

小てりや垣花ありふり咲

壺中

繡毬花

白丁花

ささりのふや口角に白丁花

尾張 一玲

玉ふれほりく成し白丁花

武蔵 班象

義植花

世の中にささる義の植花

馬逸

あつたさる榎桐や口角花

五明

志ゆら花をささる花

常笠

不通言風咲きふり花

美九

あすもん初花茄子あ茄子

石虎

花茄子ふれらも聖のひら花

岳轆

うらふらふ聖のふり初茄子

貞佐

京へ出し秤にふれ初茄子

吐月

初茄子楳花をささる花

尾張 壽心

題叢夏

一草
 人
 後物
 代書
 又成
 長翠
 成員
 甚牛
 甚村
 甚左
 成甚

茄子

多ふらん聖子やうらん初茄子
 初茄子多うらん花の咲にり
 花とらんらん久しき初茄子
 鳥羽玉のちれ茄子もよりのり
 うよらんその類いやは茄子
 白きし茄子花葉の淡 葉
 茄子見ても交ふよ(て面白き
 乾鳥に似たり茄子花一書漬
 筆の義の葉肉や花しきし
 たげのふち花はくやて草とす
 竹の子や花むにうく八き草

箭

保吉
 重原
 又成
 在亞
 寸桑
 士切
 今
 柱不
 恒凡
 少冠
 成員

竹の子は枝は通すたのり
 たけのこはれとくもむのり
 竹の子は花はつれも成枝
 竹の子は花はえりむむるむ
 竹の子や二本並べて乾のり
 成るは竹の子もむに成り
 竹の子や花は又入るはれ
 竹の子は引添ては枝のり
 たげは花は葉も葉を葉り
 竹の子や傘結添へて礼
 竹の子や花は葉のり成て

題叢夏

竹の子やまより節をて鋸りま
子たかりて家も折れや竹の親
竹の子や牡丹も子の香かきし
竹の子たせにすむ人よりを友
竹の子たをそく風もわさのそ
箒によりもつれは竹の節
箒に病のさかえちりりり
箒のさかえちりりり
箒のたけ折れぬそまきやけ
箒やけくらわきのまきし
箒のえぬらに妹の肩さぬ

斐
裏山 井肩 其堂 亞侯 一系 空権 葛三 桂堂 養也 乃亮 美榮

篠

子

心陰のひか竹々子ハチラ風
箒や下まろくまのハチミ美
ちれれとま箒にまよれり
箒やりのまぬひてまされし
箒々下そ折れぬ支にうれ
節のひ筋もれし終ふり
箒にまてま話をやく農か
箒やけしめつるまの左
箒やまむかをてりそつ
箒や兼虫のそいつおや
篠の子れまきるるり教わ

佳美 佳美 佳美 佳美 佳美 佳美 佳美 佳美 佳美 佳美
色言 左節 旭丈 天馬 春人 彫籠 砥石 女應 研石 孤風 杖長

題兼長

付る子もさむのうらみおわ
 子規路過ハカメを食わ
 郭公舞扇の影うら
 子規野に下る人なれ
 故にこれ懐にさるれ時
 杜宇わつた甲斐なれ風を
 新井つらさをさるり郭公
 似るものもさむ曉やほろろ
 寄鳥白にあらはるる白雲
 田村もなほのうらみ子規
 志出ておとさるれり郭公

几董
 公公
 蝶夢
 嵐流
 是露
 保岩
 諸九
 不明
 代書

題叢夏

郭公さむのうらみおわ
 子規うれにさるる口月か
 ちる花のうらみおわ子規
 心越してま田に低し郭公
 大いハおりの有る郭公
 郭公つ木とあらはるる梅人
 子規鳥はあらはるる子規
 杜宇もなほのうらみ子規
 寄人をは過れ居る白雲
 白凡の衣帯を郭公
 子規さるり枕の夢も白雲

公鉄船
 斗入
 公綺石
 公吉阿
 梅人
 存亞
 公
 大江丸

とまうてゑ思に足界教と
 ちあうんにゆあかりより子規
 あかりゆていやはれま子規
 号余の藤とあうるを子規
 半之瓦楠の指や部と
 世の中にたうるを子規
 心身の藤ゆふ中を子規
 子規さうやうりまめを
 契心やきにまきま教と
 赤い牙のいらもあうる子規
 子規おん提てもりあう

会 莫二
 会 恒九
 会 祐昌
 会 松見
 会 希言
 会 自樂
 会 野城
 士 切

○卅四

良しきをやう言れ子規
 村さへむら散もする大教と
 杜宇ゆや篠つらむのを
 自らついでせりあうる子規
 子規ゆや藤れあうるし
 時をゆ言やうるあうるの
 何やまてうんを語し時を
 りれあうるのあうる子規
 光われハ初言も通しを教
 周遊あうるあうるあうる
 岡鉄に藤や二日の子規

会 会
 会 樗堂
 会 会
 会 升六
 会 丈左
 会 遅月
 会 其六
 会 長翠

題叢夏

子規のやうな世の心の中
子規の風よりさきこの家
見るといふにえぬ時
この節も人もまらん子規
ちりちりといふを打上り
ややのさ木よりして子規
短おとすも短し 節
子規をいふに臨みたり
ついでにいふに子規
松折も嬉しうと節
瘦骨丸肉喰ひに暮る子規

左琴
木僊
道隣
成貞
今
今
喜年
完素
公
柳也
清ら

子規のやうな世の心の中
君の代のやうにこれや子規
時を打ひ挽ける音もやん
子規天の川風打とれぬ
の音ありりいんあつこり
あつ人とさういふと節
まるといふや井ののり
時を打ひ挽ける音もやん
昔ハ人によつては
地ふりていふに
あつあつといふに

善三
公
公
可親里
公
公
善成
祥来
車火
鬼子
宗志

花のや六眼に隈あり時を
 去るや片のくとうく子規
 子規啼て江上敷華を
 小笹中もあつじはつ子規
 去るに位つけたり郭公
 いまこころにけり花を子規
 鳴途は初言あつじ郭公
 之を鳴あそ華とや郭公
 羽をもしにけり子規を花を
 郭公一梳の葉八枚やすし
 子規人一時はわろくし

瓦張 廿六
 白柳
 互差
 今
 今
 乙二
 一子
 貞花
 今
 冥
 大身
 岳格

よまの人の心をし 子規
 初まうハハハ花の時を
 存花即言あつじのうり子規
 人更にあつじと郭公
 大空に身つふつて子規
 子規そ花戸あそけの月あこ
 めくありハ郭公の泣く子規
 七女ほどお花あつじ子規
 令屏れあつじのうり子規
 こころハのうり子規
 時を橋のあつじの葉の葉

全 全
 力化
 平角
 尾全
 全 全
 全 全
 全 全
 全 全
 全 全
 全 全
 全 全

りかたり書れはそ子規
子規吳越のふとけりり
り華ハとて後子規
子規四りれ心のさる
子規市にす心とけり
子規それと見れ心の清
白りていれ心子規
さりもありのさる子規
子規心とけり心子規
子規心とけり心子規
子規心とけり心子規

今 槐翁
長馬
今 素卿
玉屑
樽剛
椿堂
今 秋丸
蕉白

性て胸はほろもきし子規
鳴そちてちりてり子規
さるのちけり子規
海へゆきけり子規
よるのちけり子規
形よりけり子規
法ありてり子規
木のけり子規
陣よりけり子規
子規と書き子規
子規と書き子規

電権
今
今
今
今
今
今
今
今
今
今

吟時を打つ森見の子規
吟まのむらさきむらさき時
子規夢て夢うぶの一首か
夕る此をとのひて子規
子と本も眼にうしむ子規
子規うくと打つ人の友のを
公てふげんかきわぬ子規
静か一人の夢ふむむむ
子規世へくさるかかき
子規人の海をみる雪の門
走らやあはれを打つ子規

武陵
松花
季有
嵐外
全
馬仙
二人
護物
志岸
梅阿

〇廿六

吟の歌う見ゆむらさき時
子規杖もも似るむらさき
時を打つ人の下中る杖の心
横むらむらその初春の子規
萬葉をよむたにたり子規
まゝ一棒しむ子規心持
羽りのをうたひさし子規
むらむらむらむらの春平子規
子規りむらむらむら人のと
岸にむらむらのむらむら
子規あして打つむらむら

左
井眉
其裳
万和
女
左
方明
立志
漫
居然
扶拳

頭叢夏

子規 嵐の中へに家ニツ
 昼の戸をさしてをれ小子規
 花のちるに似たりをきれ小規
 古寺を望み此寺をききそ小規
 花のしるにきくの尖る小子規
 ひしよりきのふふても小規
 この中へこそ世を籠るし時を
 子規 寺のふりぬ 四りぬ
 子規 雪に七千入りふり
 時を 清れおちる人床し
 子規 星を 霧の 雪うしたり

〇廿九
 後 壺 伯 其 成 鶴 鳴 湖 中 後 塔 柑 翠 寺 河 菊 也 白 考 浪 石 鷲 雪

子規 海山に身をなつか
 子規 短くおちふ小一年
 子規 鳥居にうしにぬる規
 佛しとらあらしりぬ子規
 子規 竹のこハチにたり
 子規 竹下江上樹をき
 子規 石をき 射しきれぬ規
 古寺を望み此寺をききそ小規
 時を 初言にたれぬ小規
 子規 二寺の中へにのちる

筑 山 双 鳥 素 玩 不 轉 百 非 仙 風 林 園 孤 山 揚 子 其 圭 石 波 古 芳 出 寺 橋 丸

題 叢 夏

考考入

子規を隠れりし日此花に
 子規をのとりてその上
 時を傘下よりのりり風
 子規鳴り木末にすうけりて
 時を夢て時を風を費わ
 子規鳴りにつけてもその上
 朝露に花根の上を子規
 鶯を幾度と夢ぬ時を
 鳴りて飯の菜も子規
 子規を隠れりし日此花に
 考の考を入りてりし日此花に

似藤
 得山
 桃葉
 陶里
 尼妻乃
 成石
 士川
 方舟
 友風
 若翁
 其二

老考

考をとりてし考最の乾探か
 考の考を入りてりし日此花に
 人の老考考の考をぬそと
 考を小舟の小舟も老を鳴
 考ハ合飲のけりて老を
 考ハ合飲のけりて老を
 考の折れしおして老をり
 考を老をうりて風をれ家
 考も老をりて風をれ家
 深山様老考をりてりし日

柳起
 少高
 乙因
 士頭
 老洞
 之顧
 丘考
 一茶
 荒外
 双鳥

鳩
旭

蕪々ふたそけい号老うらり
号れ老を孤て平山の突
号ハ老ぬつり此号の号
采子号采ハひり此号に号
号ハ号ぬつりし号そ号
これに采て号り号り号
号号し本号し号り采子号
采子号采五号り此号の号
中り此号ハ号り号り号
号号し号人号し号り号
号り号り号り号り号

魚文
惟平
義色
号解
燦夏
薨左
采更
号
卷阿
號甚

号り号り号り号り号り
号ハ号り号りの号り号
白標を号に号り号り号
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り
号り号り号り号り号り

白標
全
全
全
全
全
全
全
全
全
全
全
全
全
全
全

於此し 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと
らん こと 吟 甚 似 後 せん こと

全 不 依 斗 柳 存 謀 浙 士 全
成 員 心 顧 業 兆 旦 樗 堂 日

歩 亦 以 其 妻 あり たり 中 へ こと
樹 を 立て する 所 へ 見 たり こと
り 花 に 工 け たり あり こと
ん こと たり たり たり たり たり
ん こと たり たり たり たり たり
ん こと たり たり たり たり たり
ん こと たり たり たり たり たり
ん こと たり たり たり たり たり
ん こと たり たり たり たり たり
ん こと たり たり たり たり たり

全 不 依 斗 柳 存 謀 浙 士 全
成 員 心 顧 業 兆 旦 樗 堂 日

んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり

為三
 祥糸
 不寒
 為差
 全
 月瓦
 素新
 岳輪
 電権
 号笠
 核裳

鳴止えて志まぬのつらんこと
 一證まぬ人さてんことり
 此よりよりちひさいやうんこと
 你と路や故人もさうんこと
 首筋の毛もさうんこと
 んてさやうとさむ先へおろり
 言りの印りりりりりりりり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり
 んてさやうとさむ先へおろり

衰丁
 菱亭
 寒松
 長高
 匪僕
 幸剛
 一葉
 少女
 志宇
 卓池
 護物

立橋り癖に成りりんこと
 白雲の清さをかくれんこと
 見えこそ家あるまにまゝに
 牙のつゝの歯はろしりんこと
 心人の地と見えんこと
 見えこそ吟ははれもさるり
 人よりいふと平いれんこと
 洞心に書こ交おそんこと
 見えこそうよん水のこぼれ
 見えこそ川の舟もたふれに
 舟はこれ似るまじりんこと

女 栞 阿
 其 美 子 阿
 柑 翠 阿
 大 和 万 翠
 幽 嘯
 飛 舟 湖 柱
 因 晴 村 之
 秋 光

吟下まを和へるれんこと
 瘦たそそ終りうらんこと
 見えこそともきくすむ小歌の
 大名も何ふてまふらんこと
 世を捨る心もれんこと
 見えこそあゝおれんこと
 歌とやふすまゝのらんこと
 舟雲を見てまわらんこと
 之れれれ鏡政鏡やらんこと
 人の来て歌流さるらんこと
 見えこそいづれもわらんこと

何 丸
 壺 半
 一 葉
 升 左
 橋 美
 尾 居 沙 路
 戸 津 也
 原 不 可 盈
 舟 兼 存 底
 木 老

鶴

割草鳥キハツクシ

画房のよのたしあはれんて
 入て鳥竹の古きに身をま
 世の井のきに疎りんて
 けんてあはれぬてまをうし
 方同じ羽洗物にぬれて
 麦の白鶴の鳥見ると
 竹かや依に鶴の影の
 隠れいふとよれり
 りて子身をえとひ解へ

之云
 白塔
 一風
 左節
 全
 白鶴
 竹枝
 白旗
 又

白鶴と遊むいぬわり
 入て鳥竹の古きに身をま
 世の井のきに疎りんて
 けんてあはれぬてまをうし
 方同じ羽洗物にぬれて
 麦の白鶴の鳥見ると
 竹かや依に鶴の影の
 隠れいふとよれり
 りて子身をえとひ解へ

踏石
 一草
 全
 宜麦
 如志宇
 胡準
 樽翠
 可友
 去吹

題葉夏

葭 割

よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん
よりかりやま刈苗も扱ふふん

保吉 芳之 祖風 白樺 宗漢 護物 荃村 揮堂 寛兆

鷹 入村

鷹にありし白にたれさる樹冠
樹鷹やうれもあま風さる
郊の花のちも散る樹冠
夕風や水さ誘の腰をさる
さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる

宗漢 護物 荃村 揮堂 寛兆

養 鸞

さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる

宗漢 護物 荃村 揮堂 寛兆

枝 垣

さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる
さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる
さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる
さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる
さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる

保吉 五老 保吉 都雀 揮堂 于寄 重初 松子 浮流 南畝

暮

さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる

保吉 五老 保吉 都雀 揮堂 于寄 重初 松子 浮流 南畝

蚯 蚓 出 蛹

さ誘の歌ありらぬ成り水
さ誘の人をふるをふらさる

保吉 五老 保吉 都雀 揮堂 于寄 重初 松子 浮流 南畝

題筆兼友

子 子

ほろりやむしは流るる流
子この月にくるよる小所
子こや故にきくまの流況
子この世もふんはあがり
子こは浮てみる時静うり
子こやとあししと音の教
夕立のあそを捨るやらす
歌先に来ておぼるくらす
よりあはれ笑をそ作く羽塚
くはらふの飛塚すまむ
川裂て捨る名はく羽塚

疎美 希言 三付人 一方 身自 席睡 吉成 旋剛 百地 尺文

飛 水 蟻 馬

致 端 鹿 牛

窓に供へおれは道をたつ羽塚
舞くやんたまのく風塔あり
たのし風き角とく村人端牛
おろりくとまれおれは端牛
端牛やその角文をたらし
こりみてるうりこや端牛
端牛前よりあはれはす
鹿らるる鹿の庭のさつ
あこりも余り本来の端牛
歌に向て何れ用あるさつ
牛撮にみるさつ端牛

右棧 岳耳 曉甚 麓左 荳村 公 白棧 百川 大江丸 又明 秋瓜

燭牛世にあり甲斐にうつくし
 伊勢の家のふれり燭牛
 中へいそぎみみはれりうり
 花をれ道ふふへいそぎり
 紫ぬいて柱てやうそ燭牛
 へうそ翅もあうへいそぎり
 家柄ふ枝に遠は燭牛
 るこりうゆる万角をえうれ
 田原より一原よりうりうり
 ね露や白雲居のうりうり
 るこりうゆるのうそ志つるれ

有堂
 士朗
 去輪
 樗堂
 吉成
 年心
 去牛
 一草
 及老
 考閑
 素卿

ねむりうゆるをいひうりうり
 松風や一日動くうりうり
 足すりして角をえり燭牛
 いそぎしや角ありうり燭牛
 まるくも母れうりうりうり
 うりうりうりてえれ燭牛
 万のうり花りれ角や燭牛
 四に五れ何のうりじや燭牛
 りくしてあへもえれうり
 燭牛危い事うりうり
 燭牛それうりうりの家りうり

一茶
 夢亭
 土斐
 塊翁
 蕉翁
 尾全
 樗堂
 床人
 今
 記逸
 女
 志宇

てくまをひたして焼いて
小言してふつにわらわ
隅牛すれたの角もまけり
干菜ももくきりあり隅牛
角ふらふきにむきりあり
我れけの角のやすけやあり
とふせにふて見れりあり
白たれに角ふれりあり
柴折しタアも信んあり
ふつりりふとほれあり
遊生のりふいふあり

快甚
文角
有斐
南溟
左文
思
足亮
伊勢
風也
李東
ト

〇四九

油 燧

森すのやもつれくの隅牛
折れくりに遠くあり隅牛
我れせも斯う送りたりあり
其年の市もあつたりあり
後たはけつて見せたりあり
ふつりりふとほれあり
己つりりふとほれあり
何れもふつりりあり
ふつりりありありあり
折のふに毫つありあり

古
支白
李尺
柱
可竹
可竹
可竹
南皮
文角
栗
旭女

題叢夏

ちまぐり臥然にのぞくや竿の先
伊藤女 花明
 いそとまきんもあつらふめり
下島 求一
 地衣鏡よりし 羨り臥
 曉甚

俳諧散句題叢夏中

楳丘右節輯

五 力
 疎毛龜の道にまゝ又りか
 日向
 一りたるに名をうけ又りか
 松足
 夕百の杞まつり又りか
 士郎
 水まハ花の葉の又りか
 井六
 独にハ越られ又りか
 若三
 深木の本に水す心華りか
 常笠
 け先にむれ接て又りか
 三原人
 年の丘と鳴り又りか
 菊也
 杞まぐりの心又りか
 八重花
 但

題叢夏

管原

其花名を夏にふくまふり
 水の中を走り白く
 竹垣やましく切れたる
 洞窟にありて見せし
 親の手に小浪のうら
 戸の光をよの光に
 溢るる入るとは
 山越に紅を押し
 花はうらまふ
 結てこれに
 花やも

下原 枝史
 菅原 左
 菅原 右
 菅原 左
 菅原 右
 菅原 左
 菅原 右
 菅原 左
 菅原 右
 菅原 左
 菅原 右

管原

旅人の笠にやま
 かりそめて切
 ころはははは
 経を撰て
 白雲のうら
 世の中を
 引かて
 川岸に
 花美の

菅原 左
 菅原 右
 菅原 左
 菅原 右
 菅原 左
 菅原 右
 菅原 左
 菅原 右
 菅原 左
 菅原 右

題叢夏

朝首原
 呉井の代々もすも高尾妻
 女もすありのすもあやめ妻
 藤分てあやめし山形端か
 朝あやめ市に半さるおひあり
 朝の字もふあやめたあはれ
 朝あやめこれや一りれ忘字
 仮初れ朝あやめれ日の雲
 梅のほあやめた白く朝端か
 あやめ妻て朝記さるあはれし
 世の雲の瓦もてん朝あやめ
 是にふはかるるおと朝あやめ

榎堂
 流内
 系更
 白権
 保吉
 合
 蹠六
 一醒
 成貞
 完来
 一草

又六、秋に足さるや妻あやめ
 よよよあやめあやめあやめ
 岸の下の仮孫さるん朝あやめ
 あやめけさるとりれんはくは
 さる流のをき朝もさるあやめ
 あまのあやめをけさるとりれんはくは
 世とさるん隣ありあやめさるよ流
 さるよ流や高尾妻さるん乳のあやめ
 流あやめあやめけさるる防の股
 はるよ流に金と改の口むたれに
 是凡名にさるも持ふあやめか

女志宇
 金堤
 梅子
 三霞
 白権
 保吉
 右範
 権内

題叢夏

言高刀

君の代のたけしに百や月刀か

缺も

見推

身高寺

はくま吉刀立のちああるり教か

又明

柔玉

君の代や戸地すされて百か拙

保吉

印地中

柔玉の下の野や美に美すし

ト中

紫桂

百煉鏡

弦きうハ親のんそや地中

貞佐

粽

株子て流るるり又り力

白権

すし丁や男の屋く筈粽

全

そのれ戸や粽と居く専の交

いとう大粽もくやれ柔湯か
又りこのに桂て見たるる粽か
美れ大踏走も有れ筈粽
け取やひりかろく大を粽
株 かんいこうしほく粽か
筈粽一り粒のん地すし
白漏に並りそをたりを粽
投して見たる家之を粽
柔色有るすの个粽の粒使
壹粒乳母のなりめ身とや
序もて柔れかささうし流粽

保吉
成吉
陸石
全
全
成員
乙二
蒼乳
菊也
号笠

題叢夏

拍餅

粒粒も味もろりし十圍子
馳走を子たふす云ん粒中
多粒中の抱ひに好らるる
石女のむすくくや拍餅
懐兄下傳と母のまきり
源氏画や武末の懐糸の
まきりし又りこたる懐竿
かきくともに見てり懐糸
まきり子規やりの存りか
君代の佳味方尸懐糸
板りの是も久しき存りか

旦く
梅岡
女濱藻
藁山
柳丸
保吉
不似
其六
非六
木優
尾流

削掛兜

菜子摘

又りもし勝て懐の気か
桐畑の種やれきりの存りか
白を八勝て地ふの懐りか
余込の子れの存りほく松の中
掃掃、来てとんふふね孤懐
降、白の中にならり初懐
多穴兜取あふす寸心せか
光せると古もまきり兜りか
まきりもしるんをね兜りか
百子下見とねん忘る
戸火費て菜原をむ行にり

魯隱
其梅
止松
色市
有斐
周作
披去
子鳳
不知
虎道

題叢友

加茂競る 鼻息の上も又出てくる

兒童 競る

競る所もさあ息もあつ

全 印

翠の差越の詩たなまを

全 文

むつりもさあ息もあつ

全 條

犯たるそとにさうもさあ

士 飲

多もさあハッハッさあ

井 六

さあさあ息もあつ競るか

全

さあさあ息もあつ競るか

策 朧

さあさあ息もあつ競るか

岳 輪

森轉んで見た也井の桂所

力 化

井植て現て見たる小さな

雙 阜

植る方もさあ息もあつ

東 陽

花あやめ又尺の姿をさあ

院 甚

明星に三尺候し花あやめ

力 榮

竹酔日

竹植る日も人お来て植る

士 飲

竹植てさあさあ息もあつ

全

竹あやめ植れはねに力あつ

標 雲

竹さあさあ息もあつ競る

策 朧

井さあさあ息もあつ競る

岳 輪

森轉んで見た也井の桂所

力 化

井植て現て見たる小さな

雙 阜

植る方もさあ息もあつ

東 陽

花あやめ又尺の姿をさあ

院 甚

題叢書

石翁翁

むすまに石翁印さるる水
 石翁下隣の元も柔漢時
 石翁子よまうまうし屋の境
 石翁や木のれも水もいふま
 うららやかつら張り頁具是
 世の事やあやうひるまうら
 澄入るぬ里のふらふら
 瘦うの根こまや喰わを
 鶯の元堂れまや美花刈
 美花刈 花を流すの水
 よここしとやぬん蓮の花を

蝶夢

若感

序人

年々

悦甚

白境

護物

李甚

也骨

野牛

丁廣

美花刈

蓮春系

蓮

蓮浮空

浮蓮に魚やうんそちりり
 池の蓮を空浮空の風情水
 花ハハ風登てり大蓮ハハ
 蓮咲ていやまあハハハハ
 月ヶ入やばま空ハハ蓮見舟
 白蓮に人ヶささるあぬホ
 吹売のばまに糖る蓮見ハ
 日元中や蓮のまふの風ハハ
 美併りうも夢ハハハハ蓮のハ
 咲ううそふれハハハ蓮の花
 白蓮に夕暮るるハハハハ

犯考

乃光

定左

周更

夕醉

儿董

薙左

甚村

花縣

蝶美

百明

白境

題叢夏

人たし蓮のうへりふり
ふ蓮のふやうきふり
白蓮に傘をさし女は
村のふりれとすり蓮の花
ありけりきききき蓮の花
屋成りてのそと蓮の花
心布やふき蓮のふり
うつらふいふとすり蓮か
折ふ草の枝は蓮の花
白と水中静まり蓮
蓮のふに女は子なり

月夜

宗漢 昌明 保吉 斗入 士助 全 恒丸 全 樽堂 全 会 成英

〇五七

題蓮長

蓮のふや答ふふり
白の蓮をと一味に雨をり
蚤蚤にふりふり蓮のふ
大くの蓮のふり蓮の花
新緑やう一の足は蓮の花
新緑やう一の足は蓮の花
はりく蓮のふり蓮の花
新緑の中は蓮のふり蓮の花
風をさすかき蓮のふり蓮の花
丘の家や蓮に咲いて又葉は

飛鳥

完素 沙雁 平心 葛云 一草 左差 全 等光 与沙 臣侯 一葉

藤花

白蓮のそなたをさめそすりか
 白蓮や根ぶの千れつるはれ
 蝶よりさすれやん蓮の花
 かなれ泪ここむ蓮の花
 蓮とも咲てあより外はあじ
 白蓮の一掃咲ぬ箱の中
 藤よりと枕とれり蓮の花
 蓮のまやをうつじてりたあす
 藤の花や行まをれりす心
 乃田の刈藤花とくすれ白
 その花やあうれたに風さす

耕翠
 白蓮
 釣翁
 青菰
 白老
 東珠
 藤花
 慶女
 夢村
 全
 白堆

題葉夏

その花に吸き着ん松子か
 その花やリリりりり濡院
 リ及や浮藤の花のさすま
 心子れ押りりり浮藤子
 その花に夕風そとと響りりり
 その花に抱くかゆふ余か
 その花やさうりかきり大隈
 此花やさなりたれと清光
 よここ花にすむつりや長清光
 村百や浮藤うきく花ひらく
 その花を咲ハ咲たり藤根の子

東更
 咲甚
 藤花
 悠々
 兼波
 遅白
 白芥
 乃光
 全
 一草
 等光

序

水よりて既に浮塵花の如し
 その花や水のさる人を嘆れず
 その花や風さる人も見みずし
 序や序大力の押へても
 序はくろく女子移入行り
 序大巻糸くや子殿河
 序やおのり嵐のうき根頭
 序に巻きまじせぬもろか
 川よりて序はくろくく
 序と川よりて花はくろく
 序にりくろくの更川に

鶴基
 瑞馬
 鏡喙
 女子代
 百代
 薨左
 白焼
 保吉
 重厚
 斗入
 鏡六

序はくろく世や序大花た
 序やくろくくくく
 序やあの上まてま
 序大花とくく
 序大星や巻糸の鏡
 序大花や巻糸の鏡
 序の花はくろくく
 序の花はくろくく
 序はくろくく
 序はくろくく
 序はくろくく
 序はくろくく
 序はくろくく

遊貞
 長翠
 奇樹
 一葉
 亜笛
 回人
 志守
 権剛
 斗白
 孤雲
 旭山

願叢書

菅草
花

菅草をよけ子供のはの草と
扇大花よも見ゆるありし水
岸やひかり水の葉はくし
岸をよけよけよけよけよけ
村やよけよけよけよけよけ
是指し様の故中や菅の花
菅草よけよけよけよけよけ
灯もよけよけよけよけよけ
是をよけてよけよけよけよけ
ひやくしと風もよけよけよけ
ありてありてありてありて

栗大
て
起石
木
子
士
今
洪
乙二

菅の花人かろりうう打ひひり
梳人の歌うに来りや菅の花
冬の来てよけよけよけよけ
白雲の流や先へよけよけ花
跡木の枝鳴りや菅の花
唐の菅花よけよけよけよけ
吹くよけよけよけよけよけ
蝶よけよけよけよけよけ
松風の流るに咲けよけよけ
たのよけよけよけよけよけ
花よけよけよけよけよけ

亞
葵
桂
奇
蕉
一
氏
三
志
梅
感
雲

百合

雪のうけもさむくと若の花
水音を夏風情あり百合心
山ゆりや昔しお花鏡の立派
山ゆりや齒牙の月よりついで
ゆり花のこれをとほした路か
ゆり咲て花中の花の清なり
梳篦やのゆりうつくし天香か
さゆりの雪のそよそよ伏流か
百舌をきしお花をたゆり人に
お道とこれのうつくしさをゆり花
谷もたふして残いゆり花

推己
女子代
薔左
白権
士敏
葉兆
成貞
左亮
全
奇剛
素迪

お藍花

赤ゆりや口明て花の里のや
暑がたりや折もさくれぬ花の
男ははつまずきもさしおのふ
あうり花をさつりもおのふ
おつむやあに旭の昇るうち
お花つむうしお花をさるひか
忘草の花ハハハハも咲きなり
久風に交忘草うさなかり
足根たりしてあうりさうり忘草
家の株の莞子咲ぬ序と家
志もつげやりに遠れり花の色

寛松
女子代
石嗽
共管
丈左
尺文
系更
猿左
可都里
魚文
志守

忘草

萱草

下毛花

題叢夏

金銀花 夏 菊

夏 菊
 夏の菊は花多きをいへば金銀花
 夏菊の清極見ゆる産家か
 夏菊の香は字世を清く咲
 夏菊の香は花白くや夏菊の葉
 夏菊の葉は花白くは咲に多
 夏菊や秋を菊の輝きして
 夏菊にのほき産家たかきり
 夏菊の足きりさるる咲き多
 夏菊ふや花は咲き水噴き
 夏菊ふや花は咲の咲花の末
 夏菊ふや花は咲て咲き咲し

右弁
 百明
 花縣
 恒丸
 棠兆
 平角
 考笠
 瑞子
 柳花
 院甚
 百明

紫陽花

紫陽花
 紫陽花や楸み誇りし咲き梳
 紫陽花や花は咲き千むふあえ
 紫陽花のすきり咲きさるる咲
 紫陽花や折れて花のさるる
 紫陽花や花は咲き家の花は咲
 紫陽花や花は咲き風花は咲
 紫陽花や花は咲き七小所
 紫陽花や花は咲き咲き咲
 紫陽花は花は咲き咲き咲
 紫陽花は花は咲き咲き咲
 紫陽花をわけて花は咲き咲

果更
 仁輝
 全
 保吉
 又炭
 恒丸
 雲萬
 成員
 白柳
 尾差
 素榮

題叢夏

瞿 麦

虫跡赤や日敷きりまに反裁場
 虫跡赤の杉る千白をあらやうに
 虫跡赤の花にたゞる千像白
 虫跡赤のふくも和よもさうし
 虫跡赤にうつり母さそあの花
 控子のふさうん高あゆし
 控子の交まそりれ掉りのあ
 控子たさくや花をあらして
 控子たさくしつるまらりか
 控子たさくしておるさうり之
 控子事古りしさとわ控子

陸奥

護物 北俱 新秀 松江 甲磨 存亞 恒丸 葦沱 成英 全 葛之

かなしく千白のやりのありまら
 控子たさくしつるまらり
 控子たさくしつるまらり
 道中千控子をあらうまらし
 花赤もたさく世のまのれお控子
 控子の花にあらうり心の白
 舟成の控子たの心境りれ
 控子たさくしつるまらり
 控子たさくしつるまらり
 控子たさくしつるまらり
 控子たさくしつるまらり

祥永 丁部守 一草 道亮 全 葵守 横雲 常笠 三侍人 女志守 梅河

馬齒莧	石竹	常一夏	花子の一本捲にふけれり なすしこれけのふそ雀の子 花子を喰われたりとささく 花子に鼻つゞけて是藤か 花子にやれりしと路か 扇まて花子を捲 せ左か 花交や晴天すてとまり川 花交をこ家おちうら垣る尺 なすくや花もうこ尺豆の隣 花市も懶釣学の志よりか 厩より子の子をえすなり尺							
乙二	今	道亮	末郷	吉丈	忠文	花晚	道亮	常笠	道亮	柳居

酢漿草	薄毛草	葛草	藜	附計草	苔草	十葉花	一ツ葉	覆盆子		
るはは花百やとわく 雀	るをこれ花の初も来にり	るをこれ花の初も来にり	つるをこれ花の初も来にり	和まのれろくを巻や藜の交	松風の藜より多るこ 田か	薄つふれ巻にれらくや土圭草	を本くのきのぬえんは葉か	どくたうや交のきのく花か	一ツ葉の下のもえすうけりか	若川下いちごるまの及ひり
乙二	今	道亮	末郷	吉丈	忠文	花晚	道亮	常笠	道亮	柳居

題叢夏

棠 棠 棠
胡 棠 棠
青 藤 棠
梅 棠 棠

心踏の杖に片たりつら
若くは旅人芳ていら
ありては漢の棠の志
棠の棠に片積深る
夏の棠や杉の棠の
若くは片積深る
若くは片積深る
若くは片積深る
若くは片積深る
若くは片積深る

棠 棠 棠
棠 棠 棠
棠 棠 棠
棠 棠 棠
棠 棠 棠
棠 棠 棠
棠 棠 棠
棠 棠 棠
棠 棠 棠
棠 棠 棠

南天 花

棠 花

南天の花のこころ
南天の花のこころ
南天の花のこころ
南天の花のこころ
南天の花のこころ
南天の花のこころ
南天の花のこころ
南天の花のこころ
南天の花のこころ
南天の花のこころ

南天 花
南天 花
南天 花
南天 花
南天 花
南天 花
南天 花
南天 花
南天 花
南天 花

題 棠 棠

推花

推花のふ人もすもあけ白ひつ風
よしの葉に个あふや花のふ
そのまに木うけを足さそ花のふ
雪にひさしけこころのふ
ふりももそあわてうしひつし
名飲花木陰人とりにくた
まのしりのをあやや名飲心
名飲咲て人か急了屋森か
そりたれにりもあふや名飲の上
名飲に風れあふあをささひり
名飲さくや世にあられさるる

暮市 彦人 長老 惟平 中菊 白旗 薙左 保吉 恒丸 年人 道彦

杜鵑花
公飲花

杜鵑花のふ人もすもあけ白ひつ風
よしの葉に个あふや花のふ
そのまに木うけを足さそ花のふ
雪にひさしけこころのふ
ふりももそあわてうしひつし
名飲花木陰人とりにくた
まのしりのをあやや名飲心
名飲咲て人か急了屋森か
そりたれにりもあふや名飲の上
名飲に風れあふあをささひり
名飲さくや世にあられさるる

素郷 雪雄 護物 金坑 其江 画牛 馬老 二葉 赤丸 秋免 都雀

花
花
花

題叢夏

花 檣

長白に返記とてけふ松栢
花松栢干や四不枚麴子の
先子り花檣に碑一位凡
檣や枕子身の杉人見え
檣や月夜とをれは清せり
檣の答也とをるのしり
檣のひくへある白の風
良と子じや花檣の灰の坪
檣や子り見たる女身速
檣や白灰のり大壺とる
たりの檣身と徳久風

三津人
壺枝
白檣
保吉
浙白
乙二
奇剛
号笠
竺高
碓合
米壳

檣

花檣 せうのりる白の
菰鞆の足とるまり不檣
村白やんけやきま花 檣
入そのそと咲や白も花 檣
昼の中 移立たり不 檣
心身の動と見ると不 檣
とう見ても夕暮まのそふふら
花檣をの片羽のふも来り
心梔子の花よりく咲にたり
ふらふらのふ和まの白のり
ふらふらの花を癖もたうり

檣良
燒甚
白檣
甘谷
月居
孔阜
枚枝
星譜
淳石
又蓮
以足

友木立
 友木立の花やあしき婢女泣
 口ぢりの笑ころしり門の白
 ころしやこれそとねふりも出
 ころしに一塵も平花の香
 空んて一舞越ぬ友木立
 空にたふまのひたり友木立
 酒十法中やてゆや友木立
 舟に来ぬ子ぬれぬ友木立
 友木立人のユミ坂の川
 跡き白ひ甘き白ひや友木立
 友木立歌はらひきく来にり

護物 唐人 三年 氷水 曉菘 薺古 荳杉 白樵 百明 又明 成英

白壁に若竹の帯や友木立
 埃吹くやちとひのき友木立
 片つゝは海をりく友木立
 市杖も是く是く友木立
 いは来ても夜の柝ひそ友木立
 人の足る懐かき友木立
 是りや抱きくる友木立
 百姓の家をいれし友木立
 子犯は歌や抱も友木立
 川風や暑りたり友木立
 友木立やエは男たりか

尺丈 道亮 岳輪 三唐人 壺伯 井肩 都新 紀途 鳥頂 雉啄 何頼

題叢夏

雪焼
 栞史
 眠力
 萩人
 曉甚
 吉薺
 有篁
 奇劇
 護物
 三津人
 栞園

雪とりよりの時をくくく竹
 人の来て夢又見てりやとく竹
 とく竹さくわおさるふの色
 風のふり落さる竹の皮
 仇花よりて夢くく瓜 柳
 仇花のねろくくや瓜の花
 留りよりぬくありて瓜のふ
 蔓先の水にうくく瓜のふ
 落てりくく夢のありり瓜のふ
 いっくくくわふりぬり瓜のふ
 ありくく竹ありくく花あり瓜の蔓

七里
 富春
 不
 秋
 白
 保
 存
 柳
 完
 道
 空

胡瓜
 先にゆく管ふのれくく胡瓜水
 君すきとくくと胡瓜書とくくし
 人の白たさくく瓜のくく瓜
 早松草二り此瓜も菊くく瓜
 控巻や田中の庭の這入口
 菊唄よ里や白ふく美薺子
 あり中(花)小言く子菊唄
 くくくくくくくくく子菊唄
 極くくく八束に極む子菊唄
 のくくくくくくくくく運入
 流来く余のくくくくく極くく

天瓜花
 早松草
 子菊

題叢夏

田 植

田一枚子をにちりて雨にふる
老運のりり終る日たれは
崎道やゆつりあつる老運
子菴舟庵て庵の住来か
隣田のりりてんく子菴か
白雲の个字にふる子菴か
子菴より白のけりて女まより
あつたてん終るもふる子菴か
松にりを訊ひてあつる田植か
ひりてりより淋し田植か
鈴ねてあつる田植の男か

奇閑
寛松
白塘
淡舟
雁平
石阿
幽嘯
素樸
夔左
夔村

木のよみ中松葉にふる田植酒
銀やうに白まてやん田植か
志れきーや田植大詠の白の白
一枚かりあにぬて田植か
植てきる心田を麻の海りて
りりひふくは植来る水田か
ゆる星の敷を田植の音を風
心陰へまのりてつ田植か
登大子の田植美妙な破の子
植志るるうしんにふる田植か
侍にふるるれたる田植か

白権
尼諸九
保吉
恒丸
士歌
会
会
芳之
樗半
芳成
芳三

植つては日よの田とすなり
 了やくと植て去り甲一板
 吸ふや田植のめまの板し
 いくせうの言そ田植の古教
 石室のならん田植うれ
 うくそてて佛とあると田か
 蕨蕨のわれたるの田植か
 人もう植て見たると田か
 田を植て風の戸口と来たり
 丁々のやうに多くて田植か
 り合はるとよくて田植一人

大阜
 道亮
 全
 等亮
 奇園
 魯隱
 蕉白
 武陵
 考公
 長高
 座来

送端人勢も来てはる田植か
 戸にまて植てたのまの田植か
 松うけと来てうう田植か
 帆の穴にきてま田植笠
 海に跨りてくそ田の田植か
 田を植て流もまかんくう
 田を植て志る平流のまは事
 よりかりにあり合のつ田植か
 松風たしるに松と田植か
 山陰十人女有りて田植か
 園に打のよもまてとて田植か

植堂
 卓池
 釣翁
 山人
 其苑
 郁賢
 木容
 丘徳
 尺雀
 寛右
 徳才

類聚三反

田植

吉田

夕暮の光ハハハ田植
 夕子テ於植る田
 植て只一枚の吉田
 傘としてふれに吉田
 中りハハハ道ある吉田
 凡そもハハハ吉田
 踏も人も横の吉田
 泊もハハハ信る樂の吉田
 心家もハハハ吉田
 大切ハハハ乾の吉田
 中り人もハハハ吉田

足直
 無隠
 左明
 尺槍
 百明
 湖流
 一草
 大鼻
 有居
 全
 跡少

子乙女

松風ハハハ吉田
 松原の火を捲く吉田
 秋古箇田ハハハ吉田
 大ハハハ植木ハハハ吉田
 火を焚てハハハ小家の吉田
 打ハハハハハハハ吉田
 中ハハハハハハハ吉田
 上ハハハハハハハ吉田
 笠の場ハハハハハハハ吉田
 子乙女の兼子ハハハハハハハ

松花
 一葉
 白塘
 花陶
 桑嫁
 梅向
 吳老
 蝶夢
 薔左
 尺槍

題兼友

蟬

危の子と世をわたりては拙女如
 田桂女のころひてはり庭のり
 りり庭の子乙女やとをにわ
 田桂女之嫁に抱きとせり
 子乙女に祝よとけりあはれし
 子乙女に祝よとけりあはれし
 水子所子乙女とせりあはれし
 子乙女や著にけりあはれし
 子乙女の笠やと柳と
 子乙女や登りてとけりあはれし
 初蟬や腕流ぬれは飛り

今
 院甚
 保吉
 大に凡
 養比
 月飛
 一葉
 松葉
 又切
 又明

蟬

初蟬やけりあはれしこのや
 初蟬やと家より花をちり
 初蟬や又著のあはれし
 初蟬のーアとありあはれし
 初蟬やけりあはれしこのや
 初蟬やと家より花をちり
 初蟬のーアとありあはれし
 初蟬やけりあはれしこのや
 初蟬やと家より花をちり
 初蟬のーアとありあはれし
 初蟬やけりあはれしこのや
 初蟬やと家より花をちり
 初蟬のーアとありあはれし

凡鳥
 梅回
 寛松
 梅院
 其以
 李華
 何解
 院甚
 几董
 華亦
 院甚

題董夏

松の木やろ六粒くう蜂の鳴
蜂の鳴て魚送りや縄まか
鳴蜂や浮世を風くう様の本
鳴やまは鳴蜂あんで足きんき
夕やけのやみやび松の蜂のあ
鳴中にまきくう蜂のひくわ
蜂のひくわ蜂くう木陰にれ
壁にきてうけのあきく蜂のあ
蜂のあき新にまけのあきくつわ
蜂くうやつらきうとあきくつ
人とは蜂大下庵と名まうくハヤ

保 斗 存 祐 又 士 公 三 成
保 斗 存 祐 又 士 公 三 成
保 斗 存 祐 又 士 公 三 成
保 斗 存 祐 又 士 公 三 成

くもまの蜂を浮世に心の家
蜂くうつらう鳴てのあきく
蜂くうや井戸のあきく世にあき
蜂くうやまも粒くう蜂のあき
そむいて不あきく蜂のあき
や蜂のくうのあきく蜂 公
母やむ木陰のあきく蜂のあき
蜂くうやまも粒くう蜂のあき
蜂くうやまも粒くう蜂のあき
蜂くうやまも粒くう蜂のあき
蜂くうやまも粒くう蜂のあき

公 祥 可 公 公 公 公 公 公
公 祥 可 公 公 公 公 公 公
公 祥 可 公 公 公 公 公 公
公 祥 可 公 公 公 公 公 公

題叢夏

〇りやをとりて蜂の聖を鳴
 蜂の鳴や相見にり乾の内
 蜂の鳴木は花よりも静しと
 旅人とあひやうりて蜂の音
 鳴もよし 啞蜂はやうと氣なり
 鳴立て志つらんらむこの蜂
 蜂うくやめれくさるる蜂の人
 蜂の音にうつくさるるなり
 啞蜂は若げに作とせりなり
 蜂はあやうきまもるや又花
 蜂はまるとりかたんやり舟

平角
 揺花
 花印
 卓池
 三原人
 護物
 麦老
 米老
 曰人
 元阿
 菅推

蜂の鳴やつとよいふに湧けん
 蜂の鳴や中洞の半の夢の上
 友の蜂んあとして鳴れなり
 蜂の鳴や子供の花見朝の音
 志いと鳴蜂一やや友の松
 〇蜂や春戸の小水の音をき
 蜂の鳴や眼をきけは枝の中
 蜂の鳴やうけの音を刈 揺る
 蜂の鳴や枕作らん蜂の音
 蜂の鳴やの書えんはなり蜂の音
 鼻節に押あうりなり蜂の音

湖中
 久感
 吐
 齋
 百枝
 尺
 子
 赤丸
 新肩
 文花

氣のうつる木をかきすりに輝のつ
古井戸や坂にさゝぬの言をこし
上風に坂の流りや中川が
まゐつしゑに坂を焼罷らぬ
お堀にさすやぶそ坂も書や書え
作伐て坂のありきささりぬ
さし入や人をさすさす坂の心
玉の結大をや焼けてつ坂か
坂の井へ松をこぼりてり坂か
よし田やの坂にそなれさす伊吉
坂にうつるのれさすさす坂か

古井
古井
今
几董
二柳
尺権
保吉
南明
松尾
大正
松尾

坂のりや輝り人の足に輝りさし
坂大中にまはれてある灯か
坂の心結さすさす坂か
坂をさすの氣にさすさす坂か
さす坂大をさす坂にさすさす
さす坂のありきさすさす坂か
坂のさすの水についたる坂か
坂にさすにさすさす坂か
さす坂にさすさす坂か
小庭や鹽とさす坂の連に
坂にさすさす代にさすさす坂

士
古
今
女
誦
築
柳
乙
道
瓜
一

坂の寺や花をさるる月のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
平角の豆磨りぬりの敷坂
平角の豆磨りぬりの敷坂
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき

真一
長高
一茶
平角
三層人
石浜
五光
杜厚
可児
養嶽
庄
豊
つ
油

坂
花

坂の寺や花をさるる月のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき
坂のつらにさるる花のほろしき

無底
春來
喜良
右岸
院甚
蕉白
霜操
牧童
一茶
東芽
由之

題
兼
長

坂を火

坂を火の標の末に鳴坂か
原家の多そをにき坂をか
家系や細き坂をのりとき
坂を火にむし打取と氣之
しらまの坂をハハの白んか
夕乃く坂をさくつ岡の家
坂を火のすそて美か片荒か
流うつ平坂を筆のこりの貞
杉の子れ新の坂をやく移
松に多それさくも坂のこくくか

坂考
耳考
保吉
今
松石
外六
榮兆
世
成
ノ
年
又
可
音
不
塊
氏
号
申

世の事もはこのあれたも坂をか
本さけにむそくさる坂をか
号けうすのけて坂をくれ
坂を火のすそも宿の松の枝
坂を火や扇のつすれまの香
坂を火や地州の鳴も志すり
坂を火の中うろ吼る換りれ
坂を火に志こは言平壁の百
坂にもるき洞けりたる坂をか
世の中一の平のそ坂をのうらふ
坂をたくあり平けいつかれて

成
ノ
年
又
可
音
不
塊
氏
号
申

題叢長

蚊を子

蚊の子しもくさくさなる獨如
 奔りの蚊をまてさる風くさる如
 とくさくさくさの柄息は蚊を如
 起されてまけふ秋の蚊を如
 十八夜のいもくさくさ蚊を如
 きこのまにゆりこむ蚊を如
 蚊を火や舟のあちこち人の位
 きとくさくさ花の枯枝を蚊を如
 うおさくさくさくさくさくさくさ
 りれおのくさくさくさくさくさくさ
 春中やむくさくさくさくさくさ

一茶
 毎夜
 秋夕
 憐霞
 夜来
 梅園
 鬼洞
 而后
 共咲
 天了
 恒丸

螢

螢火やまのまやうね橋の裏
 螢火やまのまやうね橋の裏
 螢のうへに吹くくさくさくさくさ
 追れくさくさくさくさくさくさ
 物元の神の裏に螢火くさくさ
 花や螢火くさを訪ふ者のま
 けく松や清くさくさくさくさ
 やあつて清くさくさくさくさ
 出逢ふて清くさくさくさくさ
 くさくさくさくさくさくさくさ
 白大原の地はくさくさくさくさ

柳尻
 宛甚
 今
 螢左
 花お
 白橋
 今
 系更
 瓜
 保吉
 吉蔵

題叢夏

久暮を管ひらに定めたり
 来ぬをうた萬のたふらに呼管
 ちをさるにりて踊るぬ管り
 際白の口又天のふる管り
 抱母とものはらうとを花管
 傘に舞えて度る片のるお
 藤屑ともうて度る片のるお
 吹風の松を舞う片のるお
 ちる管荒の花の風情あり
 布下袴のふつありし初管
 ふりもあうて志つりし管炎

戸 園
 不 眩
 感 喜
 今
 斗 入
 梅 人
 霞 城
 暁 丸
 喜 岐
 長 翠
 南 岳

〇八一

才れ男や大布系をりし管
 ちれまのれいそいうも管来を
 是見りし心の手を花管
 管をに清ると見そり入
 濁空の亦もえくろり花管
 沸くその亦も持ろり花管
 心の管笛ふく息をてはろり
 凡てはるぬ職をすは管お
 牙につくとおふあふ花管お
 帯おて子に管とす花管お
 職娘の袴あはろそ花管

士 初
 成 吳
 么
 文 左
 完 来
 喜 年
 席 枝
 可 教 堂
 么
 如 泥
 心 非

題叢夏

を風ちやる堂を誘ふ屋のさか
けりも也のまご花屋のさ
薩の言代消るぬきより花堂
堂火や雀の家の外にけり
心の揺れぬも堂もあぬか
心法やまの心をけり 堂
けりしるう水うられて花堂
物のこけにぬきまの言を花堂
秋木の葉買ひて花屋のさ
けりしはてまの言をけりし
こけにぬきまの言をけりし

一草
大阜
道亮
乙二
瓜
葵子
瓜坊
奇劇
木海
塊
實松

花屋のさか言もけりしをけりし
杉の葉のまひらけりし花屋
松枝の枝より芽てけりしか
近き心の堂とけりし小松をけり
たんと死ておとけてけりし花
まの言をけりし言をけりし
とけりしとや堂をけりし言のさ
けりし堂とけりし人の言をけりし
こけにぬきまの言をけりし
石の火とけりし言をけりし
花のけりし火のけりし言をけりし

無隈
電機
長高
等光
白人
蕉白
玉屑
一茶
権剛
匪渡
方明

昔存つとそよふ花に水風や
 自のどろろ流きて来てたり
 硯も新しく見えて初 昔
 此のかり新あるまの昔り
 海雲の唄も昔れ其明か
 松風の節は居るの夜より
 花管をひきくうて夜明け
 存分に昔れやいと来り
 霞の霞より昔と来り
 雷の音より昔と来り
 雷火や茄子此来りてありて

萬尾 万和
大和 湖中
大和 後学
女 與人
花子 其成
花子 振翠
花子 仙風
武彦 南院
武彦 國村

題叢表

昔れハ花よりしよ昔れ
 押合ぬすに居るの光如
 居る素を居るの白の如
 昔れもそも居つて居る
 片の昔れを義に來てつて昔れ
 けりあるまのたより昔れ
 子ひつて下より居るころ
 昔れも昔れハ居て居る
 永奔の松の下より昔れ
 昔の夜に昔れハ居る
 心にむすふあり昔れ

出 和友
母 是調
花 北尼
花 东院
花 贾天
花 白樹
花 春披
花 三省
花 橋棠
花 黄心
下 觀之

編 蝠

字のまや世の中よりと塊とま
塊まうつめかちひまふんか
模の戸やまふ人ありて塊の元
葉まの塊道又乳や産くし
まよとま人と打まう奔の塊
おのれもまうま塊のつりか
沖中やけをとまひよまの塊
編蝠中ひりしの葉の塊 扇
うらけりやひれまうとまま
編蝠下ひりまの女房こちとん
編蝠中ひりしは海女のまれ元

一茶
雪槍
小元
葉ま
枚長
有ま
立志
葉左
塊幕
益村
保吉

題 北 東 夏

編蝠中塊巻をまふま立てり
塊巻を塊とふまも打まへし
編蝠中えん世ハ雀うま
編蝠中巻とまうて人たり
塊のまを編蝠に塊れり
編蝠の柱え料にうれま
まうりて編蝠の世まうりり
編蝠の巻をえするり板か
編蝠中打のれくうまひり
編蝠の柱の柱まにまれり
編蝠中まの打れたる板ま

元 諸 九
高 三
葉 柳
月 記
一 草
道 亮
一 茶
塊 翁
井 眉
塊 翠
美 沙 支

水鳥巢

坊坊や若草より鳥に飛
坊坊の草は深き柳の
坊坊と鳥の坊の深き鳥
子の平ふれを六はりの世らふ
つらうまて魚のよる浮葉か
坊坊や平浮葉を浪のよる時
水の葉に坊のよるて候りたり
この白に坊のよの候の浮葉か
清ひつづく浮葉に雲かたり
急る風と坊の浮葉のよる人
おのふもあつたんて浮葉か

後野 松旋 輪之 春人 果又 今 樗也 槐翁 三浦人 菊也 寛松

〇八六

水鳥

見けりかきのあてり浮葉か
水の葉のよる柳をよる人
たけりえにり坊の浮葉か
親きの羽にゆり並に浮葉か
稻葉うさかをよる浮葉か
親きの浮葉をよるて見たり
四阿た書をよる平坊とん
更りか人書すとまら坊か
園田刈てんかよにまか森は
燕草花葉ハ鳥かよとんか
ら野かよとる答り 毒

集

梅河 子影 孕年 釣翁 月丘 湖水 多碎 菜又 菓右 今 燒香

題叢長

落りぬ見ぬさうりはなは
 ありきくくはるは左に澄のん
 橘の花をさかりはるは
 白きあはくは鶯のさむき
 袴の老をさむきは鶯のさ
 村のうすれはあて来り秋鶯の
 さむきあはくは鶯のさむき
 西風やうはるは鶯のさむき
 松風もあはくは鶯のさむき
 白の月夜は鶯のさむき

有明
 印焼
 代喜
 蔭石
 吉川
 姫丸
 士郎
 今
 今
 桂
 丈左

題義

落りぬ見ぬさうりはなは
 ありきくくはるは左に澄のん
 橘の花をさかりはるは
 白きあはくは鶯のさむき
 袴の老をさむきは鶯のさ
 村のうすれはあて来り秋鶯の
 さむきあはくは鶯のさむき
 西風やうはるは鶯のさむき
 松風もあはくは鶯のさむき
 白の月夜は鶯のさむき

有明
 印焼
 代喜
 蔭石
 吉川
 姫丸
 士郎
 今
 今
 桂
 丈左

打の書に自ら存相おふ野か
と久き時夜明て藪の草くれ
星ハ捧て居るししらぬさるか
跡の弓のたつをを星のさるか
ふれまの星の酒をハ捧てりり
心盡ま家の東や鳴くさるか
中さるれに小をさる言れさるか
凡ゆるくくさるてま鳴さるか
ま柳もまのさるや鳴さるか
奔のあささるじはまのさるか
さるまのさるひりさるれさるか

魯隱
葵言
月記
羊角
桂半
蕉百
井肩
号笠
護物
三唐人
于雷

灯もやはさるれはさるさるか
田のさるれさるれさる今さるの白
不た州蘭さるれさるれさるか
ふりまのさるさるまのさるさるか
田一ねまのさるまのさるさるれ
さるれさるれさるれさるさるさる
許やさるさるもさるれさるさるか
家おれハ鳴家おれハさるまの
叩くさるさるさるれさるさるさる
船森する家さるれさるさるさる
鳴さるれさるれさるれさるさる

後
来
釣
掬
永
株
詠
徐
女
應
二
確
会

のほろろや夫あしくと浪や
きちや舟おうにうらたの乳
うき人のおれ火とわたりあか
屋傭 唄に足もくうれ 吟
うき人のやいづれとて人の親
うぬほろろのうぬわたりふた
夕きまきうれは水にけりあね
りの舟も人あつらうあか
括りれ一咽忘れ平物の人
ふん風やまきとえうらた 海
志月尺そりやうつらふ波の男

一草
乙二
午人
一醒
舟六
一丸
夕光
養丸
養丸

〇九十

風りんととて火の息あか
舟の世と舟に食らううぬわ
下るうらうらうらうらうぬわ
う舟りた八条の川一辺わ
長松ものりりりりらうあか
銀く鐘の鳴ゆむうあか
成さうれ使さう人にかあう
杖子に揺わわてあううぬわ
うき人の子やうつらふのあかん
よきうらうて筆のうらうあか
よきあううのうらうあか

今
其
素榮
棧
少
一
有
兩
吐
勢
古

題叢夏

人のまはうまの旭おきり

陸奥

西毘

文の灰に打りこけり川人

右第

川風やう麗つるふふとに

几董

蟹翠の風をくるとおひり

菓左

中毘 橋と蟹翠の小楳か

白楳

立よる蟹翠の飛つておのま

百助

川楳やうた庭も磯別松

先来

沸いよおひりおのまの浦に急はん

末新

追よる枝に志はくお抜り

不助

お心に捨つて来りお抜り

言左

おのまは小まよるお抜り

春修

羽抜り

お抜り友とれもわねも

昌三

あるひり一まもさるお抜り

堀前

浦にまきおおてお抜り

木芽

お抜り年の下はうたこれ

魚遊

鴨の子たせれまうりおか

芳之

かたてふ志つるさたおのま

貫色

松風とこまや麻の幣角

子億

八九る麻子足送る林り

仁権

それ茶ゆと麻をまてま

今

又つたの隙ふらう麻子お

斗入

瘦お子風母と枕に麻子お

存亞

鴨子
軽皇子
麻成角
麻子

尾家夏

麻の子れきたんそく麻の妻
それをたきつてついで麻子か
子やうとも麻と氣さうる瘦もた
りうけのやまてはあま麻子か
旭の巾はーとわがさう麻子か
馳走ーそのちるまね麻子か
麻れ子のぬきそり小道水
芋のまにぬてさうー麻子か
まきまにゆきさう麻子か
素のまに麻子麻子れ鼻花
んりーらぬふり下麻子れ遠

吉川
照丸
道亮
奇剛
乙二
養丸
養子
蕉子
桂子
吉姓
夏左

〇九三

夏 麻

照 射

火 串

題 夏

すうさうのれ乳着けし麻の紋
まのまねと麻れ子なつ松り書
かし帯をさる風なれそ麻れ親
麻れ親藤さう風れりりりり
羨るに清をれて麻さうりしか
よりすしまにたう風呼の書
折角と清さうりりりりりり
恋らぬ奴てあま麻さうりり
子供さうりりりりりりりり
親ハ子れ子さうりりりりりり
焼ハ子れりりりりりりりり

可磨
微風
甘谷
一葉
養左
保吉
士助
順丸
寛松
護物
栗更

干 媛
小 祿

ほろりふつて廿十ヤ獵矢とそく小流か
拳の打火火串ふき草葉下か
よる麻やまきや串の心石を
や串足て串抱らん松の節
友心のや串ハ悔の糸燭か
松火をたらしとくうらるる
おのひ入心の突るもや串ハ
ほろりふつておのひを懐心人あり
干しうやうまきゆくく破の泉
夕風や吹さらさら小祿妻
夕暮ハ調にかささる小祿か

白 槿
保 吉
班 象
年 人
屠 猪
養 机
嘴 笛
林 風
忠 交
薨 左
公

海 老 薙
有 無 日

海老薙やまきあうらおん人の中
夕祿のおりあつ新の崖か
こそくうてそらうらうら平の口
ありしものよりや杖とゆをれ
是も大りけ百れさう子積くれ
是も大りも森てみね物くれ
やう木れふさく又月をくれ
まよひや物りうする又月を
又月白や栲んきれうそり良
糸燭て廊下さうや又月を
又月白くそそりうらわ

出 産
下 法
玉 芥
車 童
小 中 人
梅 阿
三 舟 人
柳 尻
荻 舟
公

題 兼 良

澄鏡の沈たつらん又月と日
り街るまの城のすまゑ十又月と日
又月と日やある夜ひそく松の月
又月と日や折つくちる竹の葉
仮初に降く出くちり又月と日
のれもひて風もさつさつさつさつ
又月と日より火走んとちりりり
さるるや左友漫とく又月と日
又月と日大折しるちる松の月
又月と日まの月と日又月と日
この頃いふまゝいふれ又月と日

○九四
曉春
全
兼左
標負
尺棹
公
梅人
保吉
美二
又明
存亞

又月と日や粒のゆけたる人の良
又月と日や吹風とよみたる松影
又月と日や藪の雀の鳴けり
又月と日に南天の夜のうらさつさつ
又月と日や朝より落るるややま
又月と日や松も松も友のま
又月と日のまゝいふれ松の
又月と日や枕を捲る松のま
朔のハチのちつじみ月と日
号れまゝいふれちりね又月と日
又月と日や枕くちる松のま

松兄
恒丸
全
士助
全
三笠
電洞
長翠
芳角
標負
兼左

題叢夏

梅 雨

案の戸やみりもくまを干大根
 みりもや糸のしほのふりら
 芒う降出しくりみりも
 池の子あさるくちりねみりも
 みりもや位果ぬ身をそりた
 入栞たはし鼻通さるく横か
 黄火しててをたされたるつりか
 秋夢のたおく赤き入栞か
 とくくして入栞はけり雲徒か
 栞もん徒も互に足ゆるく
 栞も養くま刈の穂ひくつ穂り

吉丸 岐東 碩高 力哉 左弁 白権 公保 保吉 祐昌 足直 道亮

梅 雨

入栞はけり雲徒の松
 けりたるを雀さるく入栞たえ
 入栞は平襪つるねつもさ
 大船を見にたる入栞たさるか
 を運もそれよりさねみりも
 人のり道はあさるくみりも
 みりも雪涼しくたりるの冷
 おうくと尾長つちりみりも
 みりもはさるくちりるゆか
 門口にこりて来りみりも
 心あをを見たり晴りみりも

等老 権剛 菅左 了然 乃亮 砂壘 全境 阿量 我少 双馬 吟権

題叢夏

短 虎
角

短 虎 角
みよるにひらきりさし席らる
短 虎 角 心の教
短 虎 角 芒生と垣の良ま
短 虎 角 毛虫の上にあまのま
力ハハ日有ハ短 虎 角とあまのま
短 虎 角 や 虫 城 の上をらし
短 虎 角 や 伽 羅 石 の 白 の 狗 ぶ ぶ ぶ
存 じ り り 短 虎 角 ぶ ぶ ぶ 枕
三 日 日 日 短 虎 角 の う つ り け
短 虎 角 不 隣 一 の 意 に け の う ち
短 虎 角 不 隣 五 に 残 る 笠 の 意

薨 左
予 醉
吾 お
今
曉 甚
白 権
几 菴
保 吉
彦 城
州 江
士 飲

麻の尾に短 虎 角のりりりりりり
短 虎 角 や 火 の ぬ ら ぬ ら ぬ ら ぬ ら
短 虎 角 の り り り り 短 虎 角 の り り り り
短 虎 角 や 人 に 尺 寸 短 虎 角 の 穴
き 里 の 短 虎 角 残 る よ り り り り
き り 短 虎 角 の 短 虎 角 短 虎 角 の 短 虎 角
短 虎 角 と 存 じ り 短 虎 角 花 の 上
短 虎 角 大 満 月 短 虎 角 端 心 短 虎 角
短 虎 角 大 満 月 短 虎 角 昔 短 虎 角 短 虎 角
短 虎 角 大 満 月 短 虎 角 昔 短 虎 角 短 虎 角
短 虎 角 大 満 月 短 虎 角 昔 短 虎 角 短 虎 角

長 翠
可 菴 堂
成 員
完 乘
不 寒
女 予 醉
乙 二
今
月 居
月 居
支 樂

題 叢 裏

満月此出ても短き夜は月
 短夜といはつるさぬ心の猿
 是にこそ短き夜や考つて
 けりてや夜の短きもあはれ
 短夜は年の風癩直りたり
 短夜は来多き未だり春の暮
 短夜のさむけ立ちたりあはれ
 短夜といふ人ふにさうりたり
 短夜や春は陰れさうしぜん
 短夜はは跨よりふくあはれ
 短夜はあはれとよりあはれなり

申多
 素郷
 武陵
 袁了
 一葉
 旦茄
 汐老
 美教
 十竹
 其来

題叢長
 短夜をば使うて尖る松葉か
 止葉のわりのさうに短しあはれを
 短夜うたはあも短しとやたり
 短夜をば提てあはれ花の雪
 短夜はくさくさあはれの雪
 短夜はあはれとさうつあはれの雪
 短夜や葉はあはれにあはれ
 短夜やあはれあはれの雪
 短夜はあはれとさうつあはれの雪
 短夜はあはれとさうつあはれの雪
 短夜はあはれとさうつあはれの雪
 短夜はあはれとさうつあはれの雪

七
 車
 葉
 久
 香
 梅
 可
 岐
 甚
 几

夏
夜

明きやあそと位見の病りれ
 跡と作る家と隣に明きき
 明ききあのもんれ工にその
 明ききあとりり舟の間か
 明ききあまや乙子の歌ととも
 明ききあを道後のはての
 明ききあそとありたのてか
 明いそくあをそあふ又位見
 流と松押合ふてあの明きき
 人き大やむ時あのお明か
 文のあのたうああれに音の

白権
 如毛
 去郷
 号笠
 幽嘯
 星傳
 梅笑
 其大
 白路
 覺左
 感去

文のあは藤丸に起てや豆腐田
 文のあは下指入戸とあふそ大あ
 文のあはとともたれする文のあや
 文のあはそにも墨丸とのと
 旅人の文のあをりお存れあ
 文のあは弓張りたうそりぬ
 文のあはそ毎日松丸物りぬ
 文のあはの才れそあ文のあ一時
 いちあも文のあはあれそとぬ
 文のあはあはあれそとぬ
 文のあはあはあれそとぬ

五
 返丸
 士
 有山
 袿
 栄兆
 朱
 着
 葵
 栞
 長

題叢夏

友の月を弄れて玩てもふのよ
世念の風をうらり友の月
おぼしとふもをなれ友の月
白鷺の音をうてあそり友の月
あつくと人にあつて友の月
友の月人をうらやむんさし
はたらくくたさしたる友の月
舟人にをぬとせん友の月
友の月夜寂鳴うあひたり
芒穂て志つらんを友の月
うちあはせてあはれを友の月

夏管
標堂
公
華泊
朱員
公
見直
完乘
年人
可劫里
道亮

はれどくは情もやすん友の月
控書の机の風をうや友の月
傾くとあそびにふけ友の月
この井に望まてのそれ友の月
とん人へ心あうれや友の月
友の月さしあそびまよふ本か
懐の中をうてて友の月
まよふや友の中をうて友の月
友の月舟の音をうて友の月
友の月よりあそびたる友の月
あはれ見らあはれを友の月

公
月无
公
乙二
公
有化
冥こ
奇剛
岳路
魯隠
支築

出らより歩くこきまて友の目
 朽書之二友くれこまの目
 凌りんくしてぬぬ友の目
 ついて来てお田のとの友の目
 友の目つやまの八情の葉子さうり
 まらにの存りとかさうり友の目
 友の目おん八ん友の目
 友の目松より出ぬを平文ぬ
 友の目いつもまわしとおれぬさうり
 さんさりと廻りさうり友の目
 小車の登おろし友の目

羨う
 蕉白
 電権
 号坐
 長馬
 其串
 括坐
 幽晴
 三座人
 少女

白れ訓て新れさうり友の目
 歌きてハ梅もむつし友の目
 蔓さうりれ遠く友の目
 陸ぬれまはまて友のつま
 ぬる存れ井筒にすし友の目
 松すし一あくの力大ぬり
 小屏風のるさうり友の目
 友の目柳さんさうりおれさうり
 赤茶の八位さうり友の目
 蛇の毛のわさうり友の目
 快さうり友の目おや班訓

羨う
 蕉白
 電権
 号坐
 長馬
 其串
 括坐
 幽晴
 三座人
 少女

題叢表

友のぬれれきりてそ光けり
 和一筆きりてきりて友のぬ
 ぬきよや白髪たりきりて友のぬ
 日のぬれ友のぬきりて友のぬ
 岸と赤いぬきりて友のぬ
 ありきりてきりて友のぬ
 友のぬぬきりて友のぬ
 桐の木にぬきりて友のぬ
 友のぬぬきりて友のぬぬぬぬ
 田ありや友のぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

心非
 念境
 梅園
 雲電
 秋石
 系美
 陶里
 福平
 尾出
 尾出
 尾出
 尾出
 尾出

故 帳

友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 友のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

文
 春一
 省己
 其夕
 左節
 左
 公
 兼お
 公
 白権
 保吉

願叢長

老よりれ伸すも是も故をの事
たつとを言れぬもし入らば故を
こころもれ悔を這出るる自れか
孫て死れはるに衣も悔の内
物息も久息も未を悔の印
故をの自れはるの小風柱よか
自れ故をに墨てそろりと出にきり
引よをもそ松をよきしきり悔の成
へたれれはかのきろくし悔の自
原をより故をも心の深しわか
悔の自れ思き入るもやろりきり

春
言
衣
衣
眉
長
樽
今
丈
完
年

白の衣は故やの七やのりりきり
悔はつより一隅をわ枝枝
悔はつて世にこれまてと孫たり
悔はつてよころのやを中思ふ
人の才も厚にすむ密や悔の自
うやつてわうとやま本のえろろぬ
り花の消れはるやの白はわか
このりのたよりうくくは故はわか
歩芽生や故を一つそむつりきり
笠の戸やうくもくくはのそ
悔はつては田畑をこれ見ゆる

白
戲
三
人
戲
英
梅
岳
力
力
白
折
力
力
白
折
岳
梅
力
力
白
折

友の友も竹の子すゝの四十一あり
 竹の子の月夜洲ま嫁入か
 竹の子にふらの白の志まき来た
 竹の子にきそくやの夜凡か
 竹の子や帆の夕凡を衣柳ま
 竹の子を志てむらり大現
 子すれぬ竹の子すし親の政
 竹の子や姉にかたるおく娘
 瓦拵枚麻子さるや過う不
 こころ子や浴衣なるしじり志
 友にりてはまにまつりし友の歌

道克
 護物
 星彦
 雅歌
 秋凡
 惟平
 芳高
 平馬
 不知志
 年人
 几童

過々花

友の歌

手の子は梳之勝し友の折
 古竹もそぎけりかたし友の折
 川趣にまふ斤人命の平の
 藤取にふれて信し友の
 塔の羽や世の人美北の友の
 神猿の美まきに好む白猫
 晒衣のまきやすしまき友の
 こころ子にまきいし晒衣
 子に片し晒衣揺りぬれり
 空塔のおも足るり晒衣
 猿人に帯片り晒衣揺

完来
 美彦
 風角
 尺明
 長翠
 白麻
 朝雀
 葛左
 栲堂
 護物
 左足

晒衣

尾物

題叢友

水を力
 六月を死るをともなるり
 六月に潮さし来る是せか
 六月に海さきくおのぬる
 六月に月や辰根さきふに身馳
 六月に月さきの物さきの身
 何れたる人さき月松の凡
 六月に月入さきさきの凡
 六月に月やまの凡さきさき
 六月に月や睡にさきさきの凡
 六月に月さきさき就にさきさき
 六月に月さきさき就にさきさき

三舟人
 春感
 彫籠
 園子
 他力
 栄花
 一字
 右杖
 桂丸
 曉甚
 瓜

氷餅
 六月を死るをともなるり
 六月に潮さし来る是せか
 六月に海さきくおのぬる
 六月に月や辰根さきふに身馳
 六月に月さきの物さきの身
 何れたる人さき月松の凡
 六月に月入さきさきの凡
 六月に月やまの凡さきさき
 六月に月や睡にさきさきの凡
 六月に月さきさき就にさきさき
 六月に月さきさき就にさきさき

周更
 白旗
 舟六
 午人
 吉牛
 道亮
 白道
 可亮
 老翁
 保吉
 南陽

一日の見了ものんせん抄 餅

一夜酒

ひの原海も華のそいつ時

序

道亮

松尾とて名もあらんひの原海

序

東吟

祇園云

力月津ノヤ人を起つらつら

序

院甚

祇園云や美着る原も風薫る

序

花市

岸いさの月くすていづ洋の児

序

几童

歌子よそゆへあれに洋の児

序

大江丸

舟とこれ蘇れ見せん洋の児

序

芸蟻

祇園云や人の存中り自か

序

一字

祇園云よれよれよれよれよれよれ

序

道亮

尺笑

嘉定

萩とてと祇園云やしも心訪か

序

電権

為瓜とて口く祇園の入りか

序

文角

百姓の澄島よりや祇園の云

序

雁赤

十六訪宛美一や嘉定吟

序

薨右

子母訪もいされにめれ嘉定唱

序

護物

川もをたつて世路のすこか

序

他力

徳すそつらりよすし世路遠

序

道亮

すしげや装束たる世路遠

序

美伊文

月丸たてきれすそ不長もさし

序

風水

鏡ふ心あれ打りぬ不長訪

序

香米

そにいらんろくへし訪

序

唐桑

富士訪

題義長

鞍馬市代

鞍馬の市代も入る花もあつて

鞍馬 一痛 凡

半夏生

半夏生に逢速の足ぬれは夏生

半夏 一草 宇橋

土用

土用の入を待つて土用入

土用 一草 保吉

虫干

虫干や世にあら人の暑くは

虫干 宗瑞 得牛

夏 日

揚の書ははらまうー古利干
虫干やうつらに足はくさる
虫干やあめの雨折くは陰るまで
虫干や世にあら人の暑くは
虫干や莽にえくまはあま
あれやあはれのあまを古用干
夏の日も多きまのそはの柳
夏のりを尺蠖のあま
あまの海をくまはあま
暑りや枕ひつとをわあま
この頃の暑くはあま

周更 凡律 蒼右 百明 白旋 一醒 武陵 桑静 万碎 蝶夢 蒼右

題叢夏

大は画に丹の色なる是か
 いと口の礼て是さるゝ元か
 り此かの浮き是さるゝ元か
 り此かの元と紙つあつて元
 端ありて書子を遊る是か
 心是りしとれさくは皮
 松此をたたいて地にたつ是か
 是りや月をぬりたる市の時
 ろはたれか又是さるゝ元
 是りやとり集たる是れ
 是りや小庭の松に遊るは

公
 曉甚
 白旋
 芸市
 公
 弘臣
 凡律
 保吉
 祿与
 士政
 公

大塚の雪をありと是か
 是りや折りく拂ふ是の砂
 是りや人の扇を二本まで
 火を焚て是さるゝつひは
 是りや押したる是のど直
 配提に女の多き是
 りはつれ是をさるゝ元
 つつと人に遊れぬ是か
 是りやあつては元
 是りやあつては元
 是りやあつては元

公
 松元
 木僊
 憐哀
 宋員
 完来
 市村
 可菴
 瓦全
 九月
 玄樂

暑りや立寄る法もうらしの木
唯近人々の名暑きわたりか
暑り此眼を休りし事りか
日暮もこころよき暑りか
暑りやまにたてぬる嵐も
柳もユエをうつる暑りか
むつしや暑と人のとえにきて
暑りや考情の跡に腐松を
暑りや此居しちうしたるを思か
ととふつそもあつし古の事
新の志を砂ほるあそきりか

百 花
桂 丸
若 白
又 飲
李 峯
路 考
左 芥
之 人
緩 駕
我 少
丁 臨

うらぬのこむれかぬの暑か
暑りやんすまをハ風のふく
十人十色に病む暑りか
暑りや命さけぬ事の上
暑りや火桶入てあるひりか
暑りや情しおりのハ海の上
暑りや角力より来る事の上
暑りや天へ雲さすの先
暑りや天の白く吹海風の
暑りやんをこむ駕の穴
暑りや白鷺をいさす事か

暑り
百 花
桂 丸
若 白
又 飲
李 峯
路 考
左 芥
之 人
緩 駕
我 少
丁 臨

題 暑 夏

夕立のすなやんは涼しく
 夕立や雲の上の星のまわり
 夕立のうらやまは煙か
 夕立の光は月のり板か
 夕立の森に疎をて道の上
 夕立の長橋を渡る男か
 夕立してをくた夕立をり
 夕立に雲吹とくく板か
 夕立のまわりはなりぬる蟹
 夕立のさて人すむ葎か
 夕立にうらやまや牛の舌

乙二
 去架
 養子
 武陵
 奇劇
 雲棧
 一葉
 幽嘯
 舟妓
 儲史
 一蕙

夕立や雲の白くおれき
 夕立や人も木の葉のまわり
 夕立はうらやまを見てり
 夕立やまをれてゆるり
 夕立や塚にうらやまの
 夕立やまをりて着の松
 夕立のまわりはまわりか
 夕立のまわりはまわりか
 夕立や雲の上の星のまわり
 夕立の光は月のり板か
 夕立の森に疎をて道の上
 夕立の長橋を渡る男か
 夕立してをくた夕立をり
 夕立に雲吹とくく板か
 夕立のまわりはなりぬる蟹
 夕立のさて人すむ葎か
 夕立にうらやまや牛の舌

丹波
 令塔
 松英
 屏星
 百洲
 三及
 虎睦
 右弁
 吳心
 一醒
 雲華
 左弁

題叢夏

う麻衣ののりあり名を寄
その舞大名指れ入る
有明ハキヤとくんきの家
醉ハ眠のまにひの夜や寄
吹さく草を根うして寄
とらりくうり糸にるるや寄
と舞場のかうるを寄
たも木ハみ尺にるるや寄
と舞入りをとむ凡情水
と舞ハひ時花に寄
すしやとたのしみに寄

道亮
今
武陵
身原
寄
瓜
凡
三人
兼也
京院
柳中

扇

おろくとして暑たり
白乞のあす多ひより
と舞ハ船とよれハ家の
ふ春にあらハ必きの
と舞ハ夏舞ハとや
あきて子舞位替て
と舞ハつゆとまの
流来て接子による
と舞ハとらりハ
片と舞ハとらりハ
舞ハとらりハ

我
和
古
夏
政
李
甚
几
今
白
雲

題義長

碑記して半の角うつる
芦刈のさしてさるる
交せりし所なりしも
多れて打つ世とるる
人の所なりし折も
軍しといひてかき
夕暮の怨れつる
白巻してさるる
されおて候跡を
りの丸の所
惟先う管さるる

保吉
希言
成良
瓦全
冥
長
一
毫
等
大
身

因
極つ所の因つる
色すきんに
めて志れ
うく藤の

六
草
花
白
几

題叢

一に二度うる人のうちハリル
白素履隣の義之にハレタリ
浪引のうちつとや死ねハ
先づハ骨もたさく浪うちハ
光疎うちより鳴るり古うちハ
りふのもたやうにやううちハ
うちハ丸つ人の心ハおらうき
浪うちハ破つとまもやすけ
うちハうり板の敷に入れり
森起りうちハうりり先れり
うちハうるまにこえや方の星

美葉
大江丸
重原
又明
士位
ノ思
成良
兄直
半免
送亮
美ち

汗 汗 拭
其 其

うちハ浪て先ぞようする存れ
や出て見ても佛もさうハハ
のせて見るまのそかかれ浪うちハ
梳人に浴さううちハ夢ハりり
謎つけの良やうちハれれりき
海心とさうこして流るる心海か
汗のふまを衣に打たよの位
玉筆の圓くさあし汗ぬえ
うちハ良ややれとさる襟の衣
うちハ良や啞の娘の人とさうり
うちハ良やんともあくり遠に

一茶
塊前
岳路
几秋
吳天
一茶
送亮
乙二

題叢夏

言りの人ちろしき掛魚か 其の 末道
 掛魚やその中より所伝の 籠 赤秋
 日 傘 障子の六松の古木や日傘 借は 嘯月
 弓より糸の細さをたむひら 白 花
 傘 徳志のむらさき 因所 服琴
 傘 うしろの力丸をたれ 保吉
 衣に入て之時を 又 保吉
 夏より 又 保吉
 とく 又 保吉
 傘 丸を 又 保吉
 乙 蝶の 又 保吉

業に 以 行
 身 松 老木の 江
 作 婦人 遊 几 董
 妻 今
 け 来 貞
 糸 可 却
 元 里
 明 人
 号 之 海
 宇 左 治
 人 夫 夫

題叢夏

抱 籬
枕

抱籬や原明て忍れ花
吹ぬけて柳をくし籬
籬の枕よりしよしと云て
こけよまゝぬに森を平籬
枯竹の歌に對して凡すし
すしとやあ仕舞なる井の
す凡や歌にふくもを
すしとやぬり日とて
すすし古人もふり
すしにに備とら半の
すしとや障をとらるる障の

海
又
道
菱
系
菱
樗
此
今
白
荳

涼

二三町ありんてり
すしとや花屋の
すしとや夢もふ
すしとや木を
村白や鶯の
すしとや余して
力人の
すしとや死
すしとや片
すしとや見
すしとやと

紗
几
秋
成
保
跨
今
八
斗
梅
川

ずしよのまゝくゝる子苑か
 日午しをるれ切さるゝの上
 登る来てずしきたり極の上
 舟の虫も思そずしや松の弓
 ずしよや麻にけれたるまき道
 ずしよのひりに余る茶糸か
 ずしよに嬉しよに枕をたれり
 ずしよの田舎にんゆり支那か
 ずしよの人たふのハ梳人こ
 ずしよやたふにんゆり老の鳥
 ずしよにいそれ命流ゆへき

雁城 恒丸 士郎 人 若翁 樗牛 五管 榮兆 菊三 米員 人

ずしよや森疎ん力に入
 ずしよや天の原よりつ回より
 ずしよや搔も思そぬ松丸磨
 ずしよや子鳥のまゝハ交のまの
 ずしよに人すしぬの流に鳥
 ずしよや下弦も命也も二人か
 ずしよをいひそめたり夏の飯
 ずしよのとりもまきぬ月夜か
 長橋をゆられてずしよのや
 ずしよや流をうつまきり
 ずしよに退て自れく命也か

可却里 人 不寒 定雅 月夜 道亮 人 岳嶺 平角 玉屑 麦迪

すしとや根茎に牛もつれんて
すしに麻のついたるつ目か
前より志をうくすし猪のあ
煎桑や汁の美を酌る春先の酒
すしとや松葉をちり末る鴨の秋
すしとや椀のよりつて牛の屋
すしとや依帖のか来たる言掛
すしとや人をと見るくは後の氣
すしとやを忘れて桑のる木下か
すしとやの香するやその香を産し
すしとや昔人のるもふつるに

養乳
瓜
芍老
一葉
長為
魯隱
奇劇
百塊
麥多
竹葉
常山

ふれとらぬさうりにすし垣の子
駕すしとられて拵ふんより
きつてすしとらるゝわおのつ
とやふれよりすしとや舟の渦
あの子にやれすしとや人の氣
すしとら進のりもせん小田の雪
おのつとすしとらりし柿か
ふれとすしと垣植もあられさ
風すしと枕屋を風うこ趣きて
すしとや雙のちりし牛ふ及
すしとや小籠此の居る筈の枝

信

護物
三津人
具也
雪権
芦葉
玄性
我意
對心
百考
小舟人
文角

秋のよきもすしき秋のよき
よきもすしき秋のよき
秋のよきもすしき秋のよき
よきもすしき秋のよき
秋のよきもすしき秋のよき
よきもすしき秋のよき
秋のよきもすしき秋のよき
よきもすしき秋のよき
秋のよきもすしき秋のよき
よきもすしき秋のよき

春哉
女きよ
扇曇
多南
典人
白寿
路丈
又道
送杖
紫石
虫草

涼

すしきと涼て実を中夜
涼より出きてすしきと涼
すしきと涼て実を中夜
涼より出きてすしきと涼
すしきと涼て実を中夜
涼より出きてすしきと涼
すしきと涼て実を中夜
涼より出きてすしきと涼
すしきと涼て実を中夜
涼より出きてすしきと涼

李天
汝川
東夜
抱石
汶里
木老
秀部
孔繁
路考
柳香
女子代

題叢夏

狭赤き急泊に歩ん夕すこ
 芦ののユ支して見る涼水
 網巾の足らぬやうり涼水
 思ひつらぬれをこすこか
 下すこ月影をく凡本の葉か
 巾しよや人こむ言飲の下すこ
 道のけてたの中をこすこか
 船ゆらん臨際も足る夕涼
 くれを拓くまむし出を涼水
 稜うふりをこすこすこく凡
 舟もこくし舟もこくし夕すこ

曉 甚
 夕 疎
 葦 亦
 薙 左
 葉 更
 白 燈
 也 互
 凡 菴
 今
 保 吉
 斗 入

○百廿五

題叢夏

袴着の人のおきまうしう人すこ
 こそを涼風せれあをう骨
 涼水そ人の長ぶる古泥 涼
 舟のこや舟をこすこすこく
 つすこ壱もをこすこすこく
 そく吐そく接投下袴すこ
 あをりしすこすこすこく
 漁火とを人て嬉うすこか
 すこ海流のうこすこすこく
 くる風をく松に揺りくすこか
 すりく柳に赤うのぬるすこ

梅 人
 大江 丸
 尺 明
 代 書
 恒 丸
 存 亞
 士 飲
 人
 丈 左
 芳 之
 之 顧

時めくや佳き花宿の小橋下
 常花は葉をさくらしきりし
 子ふもはささあつたしきりか
 瓦やくと田んぼをばはさし
 石を押し以原の空おや流し
 草のうらにほろりしきりか
 人もつれはまじしきりか
 常花はつらなほしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか

恒元 士郎 樗堂 榮光 完来 年人 吉牛 尺笑 長高 羨高 橋堂

万葉集のちきりしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか
 流石に流石にわかしきりか

常花 流石 萬和 漫之 久威 小尼 湖中 榮光

ゆきゆけりハミルはまの田の白飯
むすまも七巻良きまきしころか
松の木は海老這の房きしころか
るのしころ沈む松葉の石にころれ
蛇の毛の融しころるしころか
とほろあけりまきの院にころ
白きやしころのそりハミルか
晒井ややしつりてころのき
けり井ややまきころのけり
晒井ややしきころのそり
とほろあけりまきの院にころ

吳老
養嶽
双鳥
寛兆
方壺
桃杓
左券
百明
薨左
寸車
故授

晒井

麻地酒
心 左

あつそころや熟さへ見ゆる麻地酒
心左ころしきたれ流河之千上
心左海へれをハ遊くハ
海尺の中葉にまきころれ心左
あつそ井下小魚と持し心左
力に喰ふはハれまき心左
余まきまき良ころてそ心左
りあつりやころの足てあつ心左
あつそ下浮へる藤と瓜しき
あつそにころつて嬉し光の良
字澄にあつそあつそ大長り

一 掘
薨左
吐力
長高
一葉
寛松
米年
善記
几菴
薨杓
瓜

菴水

願叢夏

瓜

世譽ての心着るものさうりか
昔もや葉菘よりつゝるのと
瓜をを枕下瓜のさうりか
瓜を大口に是を平し瓜
人來りら地に是れを平し瓜
作らるる白一町や平し瓜
柳の葉れはさうりか
冷汁平鉢にたよるの葉
瓜大粉のさうりか
瓜に枕下しはまきか
瓜に沙漢ゆし二日確

葉 李 投
葉 車 蓋
一 葉 盧 瓦
葉 二 葉
葉 十 葉
葉 十 葉
葉 十 葉
葉 十 葉

物

さうりか
差控て月をさうりか
干飯や葉さうりか
葉さうりか
さうりか
豆粒の中にも印日ハリク
木の葉さうりか
前世いたるさうりか
むつしはさうりか
やすりに葉さうりか
葉さうりか

葉 推 已
葉 道 亮
葉 道 亮
葉 道 亮
葉 道 亮
葉 道 亮
葉 道 亮

題叢夏

林檎
百日石
夏折

鬼工の鬼に喰らうすもくれ
つらくと月夜にうしめんこわ
られハ笑しくして百日石
笑をさるふり花にさるりれ
とる子なり秋に心のうらさ
六月をさるしめり百日石
菊池遠見新の標や百日石
百日石白すも笑ハあるかし
二日月のほしめ見たり百日石
暑熱する口をたさるやとる子なり
園々く夏折 鬼工の月石

鶴老
朱員
女子代
百日石
又明
恒丸
完末
夏字
秋史
鼠飛
百日石

夏折
凌宵花
意
河

夏折のち町さるる白夜水
在柳に火のりる前ハ穰阿々
何となく秋風らるる考ハハ
常も小町も老る夏希
夏極日ののさも極さるし
夏希さるる柳や凡の菊
凌宵花秋の海に花見わら
凌宵花にこれ鳴る花舌
柳のくわつとさるしさる花さる
沢澤やりの入吹を風のさる
河骨不花さるハ花 果

白権
丈夫
夏右
白権
朱員
道亮
恒丸
完末
柳起
吐力

題叢夏

玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚
玉	芳	凡	凡	鸞	鸞	剪	息	甚

射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦
射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦	射	葦	鴨	葦

題叢夏

麻をうす女ありれや左 湯
 麻刈の麻おわあうこされんを
 麻赤く地州りに記ぬ畠か
 志こ入や木のつりてれ麻のあ
 度島や向ひの踏う支えうれ
 歩をれ麻の道は白しろまの
 白の景ひうどお今麻島
 麻刈うつれうとされる道か
 新の活てかたり麻のあ
 歩をれあもすじや麻み本
 女の児ホリ越吹に麻すりり

又
 白
 保
 長
 瓦
 道
 奇
 電
 三
 護
 力

度刈て新書のおくおれり
 麻刈て松風とるる島うれ
 麻畑や白のよとれを指ぬ多
 刈 藍に十美白よ小百わ
 藍刈をいふけしとまき 危
 葉ふ付の帝さおしや海の花
 ぞハシやとりおんがや海の花
 類白の予やうしと色海の心
 木子りりりうまに吸や海の心
 花 杉のまは古まとつれ草のふ
 草ふや後うくしてり 糖

兼
 渡
 白
 日
 久
 相
 接
 巴
 周
 微
 防
 恒
 等

兼
 建
 沙
 道
 欠
 巴
 水
 風
 最
 丸
 川

藍叢夏

夏良に物の端をぬきぬき
夏良に親の心をさしらぬ
夏良にゆく暮る人を松の陰
夏良や芋火焚きぬき行て
夏良にふて足らぬ八重巻
夏良とふり人とそのけする
夏良の白にやまゝ心ぬか
夏良やまもたのう垣一色
夏良にたかきさるむさか
夏良や家より老し暮るその
挽ふ下を風とてし捕らふ

又境
きせ
白柳
道亮
一学
奇劇
桂定
万和
兼親
右境
湖中

夕 歎

夏良や万二千取の塀の上
夏良に暮らすふてやうりたり
夏良や梳のふじらぬ良
夏良や花にさるる夏の日
夏良の夢にぬきまもやう
夏良に息吹りける木陰か
夏良やふの舟かきぬか
夏良のふや障をる字の中
夏良やま帰して梅の影に
夏良や裸て腐る人の影
夏良のふまむらさき

芝山
菱鏡
籠啄
野喬
吾友
典路
松江
左弁
多麻
瓜
曉甚

夕良のふ立とれとあはれ
 夕良の指やつ田の魚屋と
 夕良の花もむ猫や余浜の
 夕良や花に嵐の歩す
 夕良やふのこめと極と
 夕良やむしと蟹も白りし
 夕良もえれむとふの舞の
 路折けハ夕良ハ歌長子と
 夕良やおあつとれし割木波
 夕良や子と這てあつと
 夕良や今に白ふと改めん

今
 藤左
 甚市
 百由
 白境
 鳥秦
 代吉
 瓜
 東里
 松後
 大江丸

夕良や烟てあさり一人
 夕良の花のあつりの料理か
 夕良のこのはさ肌にかさるこ
 夕良より夕良出しやと
 夕良や余浜のたさる橋光
 夕良や味のこの泣をよこ
 夕良や雀の庭る夏の中
 夕良や活をよと戸一枚
 夕良や夕良大花にりりり
 夕良や夕良咲ぬ子のと
 夕良や文やそと垣の外

存
 藤左
 甚市
 百由
 白境
 鳥秦
 代吉
 瓜
 東里
 松後
 大江丸

火より右板ありしてありたり
凡の長く、薪のとも火より右
そはちや、金銀の取つちより右
橋のたもと、赤く、火より右
より、や、現に、火より右
物、あ、は、つ、れ、と、火より右
万、葉、り、軒、の、片、や、夏、の、虫
虫、と、道、ふ、心、や、産、れ、り、建、を
あ、り、に、足、送、る、産、れ、り、赤、か
産、れ、あ、わ、つ、の、虫、や、又、の、り
産、れ、あ、り、子、石、松、の、り、赤、か

号 益
赤 樹
ま 通
善 寺
滑 糸
芝 心
佐 丸
成 甚
善 右
百 明
重 厚

巻

杉の孔、人、竹、あり、産、れ、四、日、水
松、凡、に、あ、り、吹、ち、け、や、産、れ、流
碎、礎、の、心、や、産、れ、物、心、あ、り
産、れ、り、て、五、吸、の、心、は、あ、り、り
よ、り、り、や、り、産、れ、り、あ、り、あ、り、り
産、れ、揮、や、局、く、の、物、り、り、り
海、掌、心、あ、り、り、り、り、り、り、り
産、れ、揮、る、航、ハ、海、心、に、あ、り、り、り
産、れ、り、り、り、り、り、り、り、り、り
七、尺、の、屏、凡、も、り、り、り、り、り、り
産、れ、の、り、り、り、り、り、り、り、り

上 益
以 号
又 柏
宇 洋
梅 價
回 人
復 物
一 葉
尺 丈
米 袋
大 江 丸
順 丸

怪

毛

孤

魚

雲指ふたひにのりー若の音
 逝るも分るをそとく其の音
 塩の火や黄州其の溜り有
 権の本塩塩もすまを其の川、
 香してん休む八地のはりりり
 虫いしてん元虫とつて鳴るわ
 物多に毛虫落るる木下わ
 これ所と打上枝る毛虫
 砂系や川のいそり毛虫
 松風や葉中のうん這ふ毛虫
 赫而作状魚のり素を光来風

支共
 如柳
 窟来
 何しめ
 園更
 儿董
 都雀
 丈左
 一蕙
 可兒久
 乙二

航

川

物

金龜虫 子むとや長者牛おのころぬ虫
 航とれてよきてさり夜半の門
 航携て旅の老と平船のうら
 世の流に出入るもんは川の航
 つる航の揚やも力ぬらん
 川物や線の穂工凡の穂
 川物や糸を引し糸の糸
 川物や罷も必竟せりその
 番りそらかお子しめるる河か
 河物大はりりやむら木立
 河物の原投込む奔りわ

茂秋
 若お
 道亮
 復物
 木芝
 自権
 保吉
 大江凡
 道亮
 一葉
 管奔

題叢夏

芭の葉にちりしは秋のしづか
は秋してまや花毛の狭くは
牙にさす草を直折ては秋か
芭の心道の出なるとは秋か
酒後もあやまては秋は
涼しやや心まもては秋の
は秋とては秋しや人の心
は秋はあ七夕も様はは
灯籠のやうな花はは秋か
光信の画にまゝくは秋か

松光
士郎
今
芳之
米貞
普三
吉牛
石虎
今
一葉
幽嘯

川社

秋代

鴨のころは造る籠りては
は秋してまにまは狭くは
涼しやを嘘のいれぬは秋か
は秋して初まの冷人望くは
管吹をまをれりたるは秋か
は秋すやまに落ては秋か
拍子に魚のりりり川社
あ底にあの節を平に秋
秋代や男女のしるしや
秋代まを吹ふは秋か
ふまは秋を先へまは秋か

二座人
支迪
有斐
石海
白泉
双湖
白尾
漫
様
一葉
悠
悠

題叢夏

子とつれて昔此篇をさるるまゆか
 二文月よりある（むけ）る昔此篇か
 あそるんてわけるちれとく
 びらつて交をもわけれたれとく
 白ややらのとくし人のと
 志しらね神を合はれたれとく
 互様是て松凡に狗の邊りか
 交の飯を足す毎日の枕り
 ちかちかや互様起をとハツたり
 交瘦れ乳乳骨揺る様是か
 交瘦下別く雀の膝にゆく

大江丸
 方角
 西親里
 不寒
 乙二
 岳輪
 保吉
 樽堂
 道亮
 寛右
 表海

交瘦ハ男らしききりりりり
 交瘦やけさ笑物し白木様
 交のきく風白雲と飛たたり
 交心の白く色に霞にたり
 交の心つり料事さやろり
 交そのうたをさる様とわか
 交に余りてさる交の心
 交とやしやめ意さる交の心
 交心を見て立あゆの心
 交の心大石居しとあゆめさる

存
 松隣
 之庵人
 馬頂
 保吉
 又助
 恒丸
 米良
 菊三
 南心
 源心

題叢夏

文心や紫へし遊さそら
 文心や片戸明たる藁のつ
 文心や馬の落は因縁うら
 文心や灯籠提て下弦の夢
 文心や女に有て松を――
 文心や月ハ心のとをゆく
 文心や塚に追う馬の子
 文心や一節われる文心か
 文心や豆の種子か
 文心や豆の種子か

遊彦
 瓜
 右権
 如儿秋
 皇
 麦流
 雀秀
 松白
 曉甚
 士助
 恒丸
 末員

文野

文心や紫へし遊さそら
 文心や片戸明たる藁のつ
 文心や馬の落は因縁うら
 文心や灯籠提て下弦の夢
 文心や女に有て松を――
 文心や月ハ心のとをゆく
 文心や塚に追う馬の子
 文心や一節われる文心か
 文心や豆の種子か
 文心や豆の種子か

甘言
 完末
 月派
 手馬
 雲白
 鶴踏
 恒丸
 尺笑
 左角
 江鏡
 末陵

文川

題叢夏

入直の跡しき交と成れり
心機や古まかろく此交より
そりろく交にすろくまは此
何了や片ろくろく交の氣
交りや機を本陰の料能のり
又まろく交のの心机 為
村るハちつとろくれと交ハ来る

陽子
寛松
古卯
鐘啄
確合
惟平
方斜

